

史跡上野国分寺跡

発掘調査概要 4

1983

群馬県教育委員会

史跡上野国分寺跡発掘調査概要 4 正誤表

頁	行	誤	正
1	5	● 微高台地上に	○ 微高台地上に
3	10	● 進展に併い	○ 進展に伴い
5	16	●● 梁間 2 間 (3.45cm)	○ 梁間 2 間 (3.45m)
12	Table.2 ⑦	● 外面高台にかけて水引き	○ 外面高台にかけて水挽き
20	Table.4 ③	● 黄土色の斑点あり	○ 黄土色の斑点あり
21	23	● 全体的に平坦である	○ 全体的に平坦である
21	25	● ほぼ平坦な安山岩	○ ほぼ平坦な安山岩
25	32	●● 標高が129.90cm前後で	○ 標高が129.90m前後で
28	Table.7 ②	● ロクロ水引き成形	○ ロクロ水挽き成形
29	Table.8 ③	● ロクロ水引き成形	○ ロクロ水挽き成形
29	Table.8 ④	● ロクロ水引き成形	○ ロクロ水挽き成形
32	7	●● 標高は126.65cm付近で	○ 標高は126.65m 付近で
34	Table.9 ⑤	● 巻きあげ水引き成形	○ 巻きあげ水挽き成形
35	Table.12表題	● 軒丸瓦	○ 軒平瓦
38	Table.30表題	● 軒丸瓦	○ 軒平瓦
40	1	● (イ)と類似したものが	○ (イ)と類似したものが
60	4	● 7.第23次B軽石層下瓦溜	○ 6.第23次B軽石層下瓦溜
61	2	● 10.第23次瓦溜「大伴」	○ 7.第23次瓦溜「大伴」

序

史跡上野国分寺跡の保存整備事業も4年目となり、発掘調査の結果、1230余年前に建てられた伽藍の様子も次第に明らかとなってまいりました。今年度は平安時代の記録に書かれた南大門や僧房の跡を確認することを中心に発掘調査を進めてまいりましたが、南大門跡では建物の礎石や築地堀の跡が発見されるなど、注目すべき成果を上げることができました。また史跡地の公有地化については、地権者ならびに地元の方々のご理解とご協力により指定地内の墓地の移転をほぼ終えることができました。

この調査の概要を紹介し、今後の事業の進展の一助とするため本書を刊行いたしました。関係者をはじめ広く県民の皆様にご活用いただければ幸いです。

最後となりましたが、本事業を進めるに当って多大なるご協力をいただいた文化庁、地元教育委員会など各機関、地元をはじめとする多数の方々に深甚の謝意を表する次第です。

昭和59年3月31日

群馬県教育委員会教育長 横山 巖

目 次

<p>I 遺跡の位置と立地環境…………… 1</p> <p> 1. 位 置 …………… 1</p> <p> 2. 立地環境 …………… 2</p> <p>II 調査に至る経過…………… 3</p> <p>III 昭和55・56・57年度調査の概要…………… 3</p> <p> 1. 昭和55年度の調査 …………… 3</p> <p> 2. 昭和56年度の調査 …………… 4</p> <p> 3. 昭和57年度の調査 …………… 5</p> <p>IV 調査の概要…………… 6</p> <p> 1. 目的および調査方法 …………… 6</p> <p> 2. 調査の経過 …………… 8</p> <p> 3. 第12トレンチ拡張調査 …………… 9</p> <p> (1) 遺 構 …………… 9</p> <p> (2) 遺 物 …………… 12</p>	<p> 4. 第20次調査 …………… 14</p> <p> (1) 遺 構 …………… 14</p> <p> (2) 遺 物 …………… 16</p> <p> 5. 第21次調査 …………… 18</p> <p> (1) 遺 構 …………… 18</p> <p> (2) 遺 物 …………… 20</p> <p> 6. 第22次調査 …………… 21</p> <p> (1) 遺 構 …………… 21</p> <p> (2) 遺 物 …………… 26</p> <p> 7. 第23次調査 …………… 30</p> <p> (1) 遺 構 …………… 30</p> <p> (2) 遺 物 …………… 34</p> <p> (3) 文字瓦 …………… 39</p> <p>V ま と め…………… 42</p> <p> 図 版…………… 44</p>
--	---

例 言

- 1 本書は、群馬県群馬郡群馬町東国分他に所在する史跡上野国分寺跡の昭和58年度保存整備事業の概要である。
- 2 本事業は、国庫補助事業として群馬県教育委員会が実施した。
- 3 本事業は、史跡上野国分寺跡整備委員会の指導を受け、群馬県教育委員会文化財保護課主任前沢和之が担当し実施した。
- 4 出土遺物については整理途中であるため、その一部に触れるにとどまる。
- 5 出土した遺物は群馬県教育委員会が保管している。
- 6 本書の作成、編集は前沢が担当し、遺構実測・写真撮影は前沢他が担当した。遺物実測および実測図トレースには関口功一氏他の協力を得た。

史跡上野国分寺跡整備委員会委員・幹事

<p>委員 大図軍之丞(委員長・県文化財保護審議会委員長)</p> <p>坪井 清足(副委員長・奈良国立文化財研究所長)</p> <p>大塚 初重(明治大学教授・考古学)</p> <p>平野 邦雄(東京女子大学教授・古代史)</p> <p>近藤 義雄(前橋市立図書館長・中世史)</p> <p>藤井 精一(前橋市長)</p> <p>志村喜三郎(群馬町長)</p> <p>女屋 覚元(県総務部長)</p> <p>加門 勝(県土木部長)</p> <p>横山 巖(県教育委員会教育長)</p> <p>石田 重男(県教育委員会管理部長)</p> <p>退任 田中 綾治(前群馬町長) 新井 健二(前県教育委員会管理部長)</p>	<p>幹事 田中 哲雄(奈良国立文化財研究所技官・史跡整備)</p> <p>福田 拓(造園家)</p> <p>松島 栄治(県立前橋第二高等学校教諭・考古学)</p> <p>青柳 勇(県総務部財政課参事)</p> <p>山本 肇(県土木部都市施設課参事)</p> <p>矢沢 隆資(県都市公園事務所長)</p> <p>森田 秀策(県教育委員会文化財保護課長)</p> <p>井上 唯雄(同 参事)</p> <p>岸 栄(同 参事)</p> <p>前沢 和之(同 主任)</p> <p>松山 亨玄(前県総務部財政課参事)</p>
--	---

I 遺跡の位置と立地環境

1. 位置

関東平野の北西隅、前橋市街の西方約4kmで、群馬郡群馬町東国分・同引間・前橋市元総社町に跨る位置にある。地形的には榛名山東南麓に広がる扇状地の末端にあたり、南を染谷川、北を牛池川に挟まれる北西から南東への緩い傾斜を示す微高台地上に立地する。寺域の北西部は標高129.0m、南東部は127.5mを測る。西から妙義・浅間・榛名・小野子・子持・谷川・赤城の山々を眺み、南には平野が広がる景観をもつ。

史跡地の北側に町道、東と西側に小道が走り、南にはテラス状の平坦地が約100m続いて染谷川に至る。北側に群馬町東国分の集落が近接するが、南・東・西方は畑と水田で家屋は少なく、比較的良好な環境が保たれている。寺域内は北半部に民家と墓地があり、中央部に金堂と塔跡が土壇状に残る以外は畑地であり、かつては桑園であった。

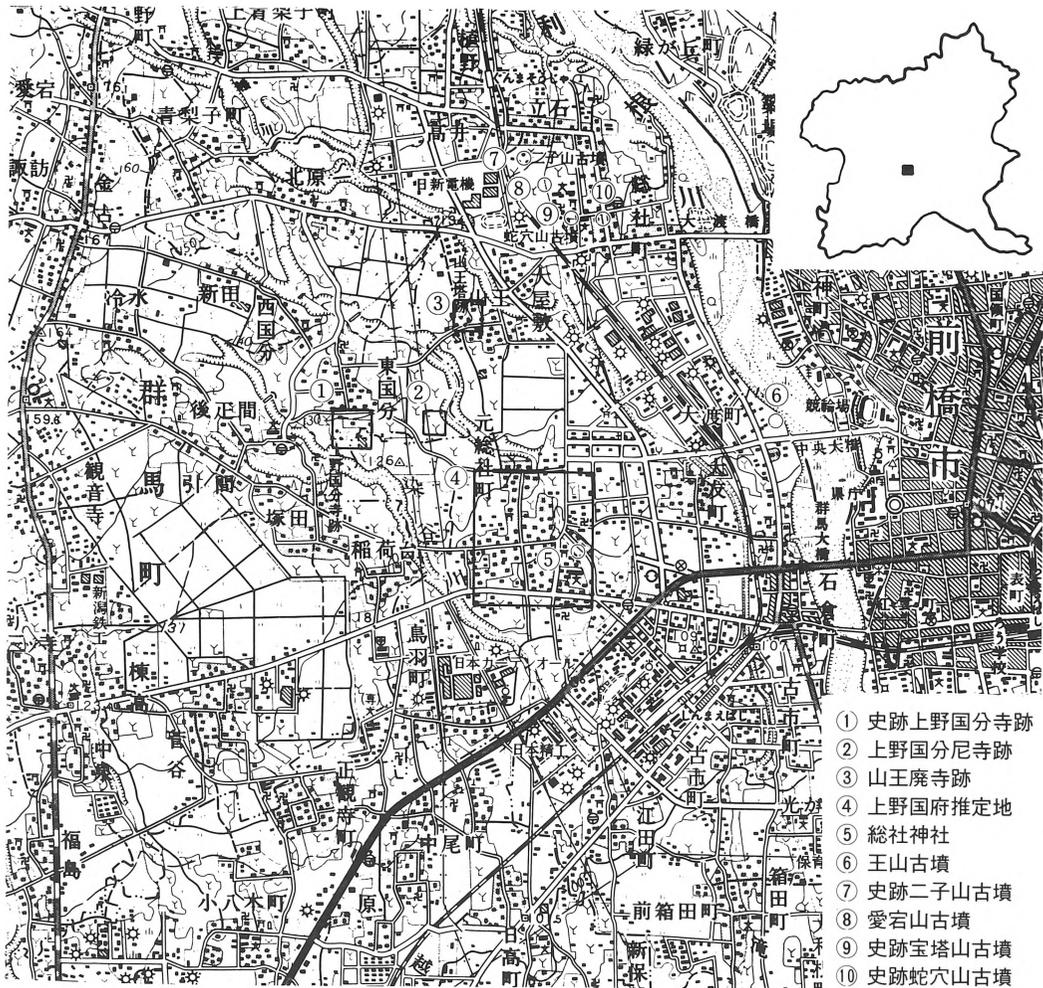


Fig. 1 史跡上野国分寺跡と周辺の遺跡 1/50,000

2. 立地環境

東方約500mに国分尼寺がある。昭和45年に行なわれた調査で6×4間の講堂と推定される礎石建物が確認されているが、伽藍配置・寺域の範囲については不明な点が多い。現在は畑地となっており比較的良好な環境を保っているため、今後調査が行われればそれらも明らかにされることが期待される。南東約1.4kmには国府推定地がある。市街地化が進んでいるが、旧総社の跡とされる小祠などがあり、南面には推定東山道に接して人為的とみられる段差が認められる。また北東約1kmには7世紀後半の創建である山王廃寺がある。ここには地下式の塔心礎や石製鷓尾・根巻石が残っており、「放光寺」とヘラ描きされた瓦が出土している。国分僧寺と尼寺の間を南北に貫くように建設されている関越自動車道の敷地の発掘調査では、縄文時代から近世まで各時代の遺構が検出されているが、奈良～平安時代の集落も多く確認されており、そこから出土した瓦や石材などの遺物と併せて国分寺の立地や変遷と密接な関連を示している。そして南約3.5kmの日高遺跡では広い範囲に条里制地割をもつ水田址が検出されている。これらの遺跡の所在から、この一帯が律令制下における上野国の中枢部をなしていたことが知られる。



Fig. 2 上野国分寺跡全景 (昭和56年3月撮影)

Ⅱ 調査に至る経過

上野国分寺跡は、平安時代中頃の記録が残る稀有な遺跡として知られており、大正15年10月20日付で史跡に指定された。指定面積は62,092㎡で寺域の南面部分も含んでいる。昭和43年に関越自動車道の基本計画が、その翌年には整備計画が発表されたが、それによるとこの自動車道は国分寺跡の東側約150mのところを南北に走り、南東約2kmのところには前橋インターチェンジができることになった。この開通により国分寺周辺への開発の波及は必至の情勢となり、群馬県教育委員会ではこの保存のため指定地の公有化を検討し、昭和47年度から地権者との折衝を開始した。その結果、史跡上野国分寺跡土地買上事業は昭和48年度から開始され、以後昭和58年度までに総事業費11億1,922万円、買上面積は51,463.35㎡で全体の82.9%となった。

この土地買上事業の進展に併い、昭和55年度から史跡上野国分寺跡整備委員会を発足させるとともに、遺構を確認し整備のための各種の資料を得るべく発掘調査に着手した。

Ⅲ 昭和55・56・57年度調査の概要

1. 昭和55年度の調査

寺域および主要伽藍の配置の確認を目的とし、全域に第1～11トレンチ(巾3m)を設定して実施した。

遺構 確認された遺構の概要は次の通りである。

- ① 第1、9トレンチのS96～101で南辺築垣(SF01)が確認された。基底巾4.8～6m、上端巾(現状)1.5mで、高さは寺域内から0.7～1.4m、寺域外から1.3～1.8mを測り、断面は台形状を呈す。地山を削り出し、その上に粘性のある黒褐色土を積んで造っているが、版築の状況は見られない。南側に接して巾約3.6mの浅い溝(SD01)があり、また北側には巾40cmの小溝がある。築垣の北側には瓦片を包含する層があり、この上に浅間山噴出のB軽石(以後、B軽石と略す)の純層堆積が認められる。築垣の走向はE-3°50'-Nを示す。
- ② 第5トレンチのE127付近で高さ48cmの基壇状の立ち上がりが発出された。金堂の東方にあたり従来から東大門が想定されていた地点であるため、その基壇の一部である可能性が考えられた。またE108～112.4でも高さ34cmの削り出し基壇状の遺構が発出された。
- ③ 第11トレンチの塔跡に近い位置に瓦の集積があり、W1～3では8世紀後半の竪穴住居(SJ01)が発出された。また寺域の中央部を南北に走る細長い窪地は、深さ約2mの溝状に掘られたものであることが確認され、底部から五輪塔・馬骨などが出土した。
- ④ 南辺の第2・7、西辺の第3・4、北辺の第6・8トレンチでは、国分寺に直接関係する遺構は確認されなかった。

遺物 コンテナバット200個分が出土した。その大部分は瓦であるが、奈良～平安時代の土師器・須恵器・中世土器も出土しており、特に奈良三彩片の出土したことが注目される。

発掘調査と併せて、金堂・塔跡の現況実測図(1/50)の作成、航空測量用写真の撮影を実施した。また、第1回整備委員会を昭和55年11月18日、同幹事会議を昭和56年3月5日に開催した。これらの成果は『史跡上野国分寺跡一寺域確認発掘調査概要一』にまとめて発表した。

2. 昭和56年度の調査

先年度に引き続き寺域および主要伽藍のうち講堂と回廊の確認を主な目的とした。金堂周辺と東半部に第12～15のトレンチ（巾3m）を設定し、検出状況に応じて拡張を行った。

遺構 確認された遺構の概要は次の通りである。

① 第5トレンチを史跡地東端まで延長し、南北方向に拡張した。N17・E132で100×70cmで上面が平坦な石1個を検出した。西側を低くしているが、(イ)これは『史蹟調査報告第二』（内務省1927年）などにおいて「安山岩の自然石にして一部を欠損し居り、其下方には根固めの為めに入れた多数の丸石を存し、礎石たることは明白であった」と述べられているものと同一とみられる(ロ)道路を挟んで東側にも同様な石の所在することが確認されている (ハ)原位置から若干移動しているが、これと金堂中心との距離は106.8mを測る、などの点からこれを東大門西側柱列の礎石の1つと推定した。史跡地内では主要伽藍と方向を同じくする2×3間の掘立柱建物(SB07)、8世紀後半頃の竪穴住居(SJ05・06)、土壇(SK01)、これの覆土上に造られた平安時代の竪穴住居(SJ02・03・04・07)などが検出されたが、築垣あるいは溝などは確認されなかった。この北方の第13トレンチでも同様な状況であり、東辺築垣は史跡地東辺に沿う農道に一致することが想定された。先年度調査で基壇状の立ち上がりとしたのはSJ06の東側壁であることが確認された。

② 金堂の北方～史跡地北端の第12トレンチでは、地山を浅く掘り込み、周縁に玉石が散在する径約90cmの円形の掘形を2ヶ所で検出した。これを周辺の7ヶ所の円形掘形と玉石集積とを併せて検討をした結果、中央部の間口420cm、その西側が390cm、奥行は4間で330cm等間、中軸線は金堂と一致することがわかり、これを講堂跡(SB06)と推定した。金堂とは中心—中心で4,710cmを測る。桁行の両側部分は攪乱のため検出できず、また基壇の痕跡も確認できなかったため、全体の規模は不明である。

③ 塔跡東側の第11トレンチの拡張を行ない、東壁にカマドを持つ竪穴住居(SJ01)の全容を確認した。S9・W1では径約80cmの円形土壇内に玉石が密集してあるのを検出した。金堂の西側柱列から14.5mの位置にあり、西面回廊の礎石根石の可能性もある。第5トレンチの金堂東側では土壇があり、下層部から「至徳二年」(1385年)、「応永十八年」(1411年)の年号を持つ宝篋印塔・五輪塔などが出土した。この土壇により回廊と金堂の取り付け部は確認できなかった。

④ 塔跡と中軸線を挟んで東に相対する位置に第15トレンチを設定した。ここは地山が窪地状になっており、ここに夥しい量の瓦が山積み状に検出された。この中には壁土・漆喰片・木炭片が混じり、下部からは溝状の切り込みをもつ凝灰岩切石が出土したことから、建物の部材が一括して廃棄された状況が想定される。瓦の中には石臼・内耳塙形土器が入っていることから、廃棄の時期は中世であるとみられ、金堂周辺から出土する中世の石塔類との関連が考えられる。

遺物 瓦を主に、コンテナバット110個・20kg入飼料袋497袋分がある。土器類では奈良三彩片、「福」と墨書する須恵器埴、内面に輪宝を墨書する中世の素焼きの皿など、また円面硯・瓦塔などがある。文字瓦は300点近くあった。石造物は宝篋印塔・五輪塔など70点の出土をみた。

発掘調査に併せて、航空測量による地形図(1/200、1/500)を作成した。また整備委員会幹事会

議を昭和56年9月22日、整備委員会を昭和57年1月13日に開催した。これらの成果は『史跡上野国分寺跡発掘調査概要2』にまとめて発表した。

3. 昭和57年度の調査

第16～19次調査を、寺域南東隅周辺の確認、塔基壇と西面回廊の確認を目的として行った。

遺構 確認された遺構の概要は次の通りである。

① 第16次調査は南辺築垣(SF01)と東辺築垣との交点と推定される部分およびその南側で行った。地山はS100～101で階段状に削られており、これより南側では次第に低くなっていく。これは築垣基部の造作とみられるが、上部の築土は残存していない。築垣の南側は染谷川に向って広がる谷地形となっており、その東側の肩部はE135付近にある。この谷地の土層の中位にはB軽石の純層堆積があり、谷地の縁辺部には踏み固められた状況があつて、B軽石堆積以前に改修のなされていたことが考えられる。以上のことからこの谷の北縁上を南辺として寺地の占定がなされたことが窺える。また谷地の底部付近からは大型の瓦片が出土しており、南辺築垣は瓦葺であったとみられる。

② 塔跡南東側の第17次調査では、一帯に軽石混黒褐色粘質土の盛土があり、これがW12～13を境として塔跡寄りでは一段低くなっており、一面に瓦片と土器類が散布している状況が確認された。W7～10で金堂と方向を同じくする梁行2間(3.45cm)の掘立柱建物(SB09)が検出され、西面回廊の一部である可能性が考えられたが、南面回廊の部分は検出されなかった。

③ 金堂跡西側の第18次調査区は、地山面まで浅く遺構の残存状況は悪い。SB09の北側への延長および金堂への屈折部は検出されなかった。N5・W7付近で2×3間の掘立柱建物(SB08)を検出したが、これは調査基準線に対し北で約4°30′東へ偏しており、柱穴掘形の埋土に瓦片の含まれていることから、平安時代に属するものとみられる。また塔跡の北東約23mで竪穴住居1軒(SJ08)を検出したが、カマド焚口には丸瓦が使われている。又底面から出土する土器から平安時代前期のものともみられる。金堂の西側の部分には中世に属する墓壇7基と井戸(SE03)があり、国分寺廃絶後金堂周辺が墓域化していたことを窺わせる。

④ 第19次調査は塔基壇の規模と構造の確認を目的とした。この結果、基壇は一辺長1920cm(64尺)側柱列からの出は420cm(14尺)で、旧表土を掘り込んで版築状に盛土をし、標高129mを基部として角閃石安山岩切石を積み上げて側面の化粧をしている。礎石上面は標高130.25～130.34mであることから基壇の高さは120cm(4尺)前後であるとみられる。また基壇は現状では南と西に広がっているが、これは後代の堆積と明治期の盛土であり、塔院に関する基壇ではないことが判明した。

遺物 瓦を主に、コンテナバット300個・飼料袋1200袋分以上が出土し、特に塔に使用されたとみられる軒丸瓦の中で素弁8葉で花卉が楕円形状となるものの量が多いことに注目された。

発掘調査に併せて「史跡上野国分寺跡整備基本計画」を委託して作成し、また昭和57年8月3日に整備委員会幹事会議、同9月29日と昭和58年2月15日に整備委員会を開催した。これらの成

果は『史跡上野国分寺跡発掘調査概要3』にまとめて発表した。

IV 調査の概要

1. 目的および調査方法

目的 昭和55・56・57年度の調査の成果にもとづき、整備のための具体的な資料を得るために次の諸点を目的として実施した。

- ① 僧房の位置と規模の確認。
- ② 北辺築垣の位置と形状の確認。
- ③ 中門および南面回廊の確認。
- ④ 南大門および南辺築垣の確認。
- ⑤ 南大門周辺出土の瓦類の調査。

調査方法 基本的には昭和55・56・57年度と同じである。

- ① 昭和56年度まではトレンチによる調査を主とし、状況に応じてこれを拡張する方法をとり、第1～15トレンチを設定した。昭和57年度以降は発掘区域を面的にとるためトレンチの名称を廃し、「第〇次調査」と称している。
- ② トレンチ名称との混同を避けて第16次調査から始め、以後調査順に第23次調査まで実施した。
- ③ 調査基準線は国土座標第Ⅸ系 $X=+43,750.0$ 、 $Y=-72,500.0$ を基準点とし、座標北より4°西偏させて設定した。ただし本書においては、方位は国土座標によって表示している。
- ④ 各調査区域・遺構の座標値は、基準点を(0・0)とし、東・西・南・北をE・W・S・Nとして、これからの距離(m)でもって表示した。
- ⑤ 遺構の配置などの検討にあたっては1/200および1/500地形図を使用した。

Table. 1 調査区の位置と目的

発掘面積 1,924m²

調査次	位 置	目 的	備 考
12ト レン チ 拡 張	金堂の北方・講堂跡の南側 N58~64 E6~11 N56~64 E16~27 N55~58 E36~40	柱穴列(SA01)の全容の確認	調査面積 107m ² 昭和56年度調査の拡張
20	講堂跡と北辺築垣推定位置との間 N88~94 W0~15 N88~98 E6~12 N98~118 E2~12 N88~115 E31~50 N88~94 E51~70	僧房の確認 寺城北辺部の状況確認	調査面積 977m ²
21	史跡地北西隅の墓地跡 N126~137 W64~68 N128~135 W69~73 N126~137 W73~80	北辺築垣の確認	調査面積 120m ²
22	金堂の南方 S39~59 E27~37 S45.5~54 E37~42 S28~38 E50~53 S37~46 E50~65	中門・南面回廊の確認	調査面積 401.5m ²
23	寺城南辺の中央部 S92~102 E26~37 S102~109 E28.5~37 S85~101 E59~65 (S93~102 E6~12)	南大門・南辺築垣の確認 SB02の全容の確認	調査面積 318.5m ² S85~101 E59~65は 第1トレンチの拡張 S93~102 E6~12は 調査が一部未了

⑥ 遺構は次の分類記号によって表示し、それぞれの遺構ごとに一連番号を付した。

SA：柱穴列など SB：建物 SD：溝・濠 SE：井戸 SF：築垣・塀 SJ：竪穴
住居 SK：土塹 SX：性格不明

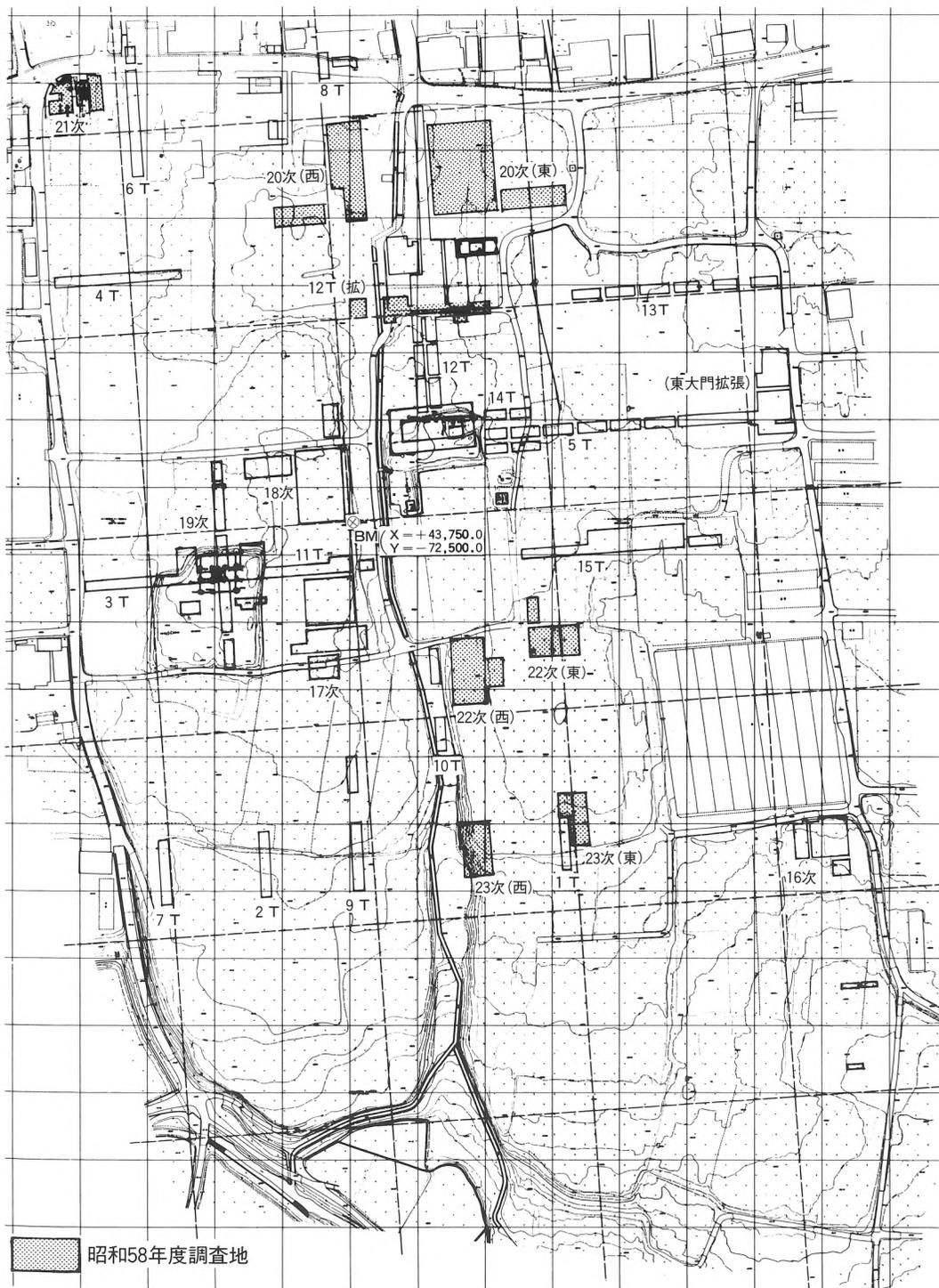


Fig. 3 遺跡全体図・トレンチおよび調査区位置図 1/2,000

2. 調査の経過

本年度の発掘調査は、昭和58年4月26日から12月17日まで実施し、同12月19日からは資料および出土遺物の整理を行っている。以下、その経過を月ごとに略記する。

4月 調査の諸手続き、準備のうえ、26日より第12トレンチ拡張区の調査に着手する。SA01の柱穴が西に2個検出されるが東への広がり無く、全部で9個＝8間分を確認する。

5月 SA01の精査と並行して第20次調査に着手する。全体に移転家屋や溜池の跡があるため攪乱が著しく、砂礫層の地山で小柱穴が多数検出される。史跡地北西隅、金堂跡にある墓地の移転が始まり、これの立合い調査をする。

6月 第20次では地山が流水により削られた状況があり、僧房と認められる建物の遺構は確認できず、国分寺に係するものとしては平安時代の井戸1基を検出したにとどまった。また流水による砂礫の堆積があり、この下面では一辺30cm前後の小形の柱穴が多数と中世に属するとみられる井戸2基が検出された。

7月 第20次を東・西に拡張するが、一帯に流水の痕があり僧房などの遺構は確認されない。

8月 第20次の精査を進めるとともに、第21次調査に着手する。表土は10～20cmと浅く砂質土の地山となる。墓抔による攪乱が著しいがN 131から北で地山が僅かに高くなっている状況が確認され、北辺築垣の基部である可能性が考えられた。組立式収蔵庫を新設し遺物を収納する。

9月 第22次調査に着手する。ロームの地山まで攪乱が及んでおり、中門と推定した位置には中世～近世の東西溝がある。この南側では黒褐色粘質土の堆積があり、この面で古墳時代後期の竪穴住居が検出された。東方に拡張区を設定するが、ここでも南面回廊は確認できず、古墳時代後期の竪穴住居と中世とみられる井戸が検出された。ただ東西溝の底部にはやや小形の礎石とみられる石が2個転がり込んでいることが注目された。

10月 第22次の精査と併せて、第23次調査に着手する。表土の排除を進めるうちに南北方向に礎石3個が並んでいるのが検出され、南大門の東側柱の礎石であることが確認された。またこれの東側に南辺築垣が検出され、地山を削って造った基部の上にロームなどの粘質土を使った版築様の盛土のあるのが確認された。また周辺には多量の瓦が散布している状況が検出された。

11月 第23次の調査を進める。南大門基壇の基部にある玉石列が検出されたが、方向を異にして2列あるのが確認され、建て替えの行われた可能性が考えられた。また東方に拡張区を設定して南辺築垣と瓦積み基壇をもつとみられた建物跡の全容の検出を行った。1日に整備委員会幹事会、21日に整備委員会を開催した。

12月 第23次の西方へ拡張区を設定し、南大門の西側部分の検出を行ったが、築垣の一部を検出したにとどまった。実測などを終了し、12月10日に現地説明会を開催した。17日に埋め戻し作業を完了した。

1月以降 各種調査資料の整理と出土遺物の注記・実測・拓本などの作業を進める。

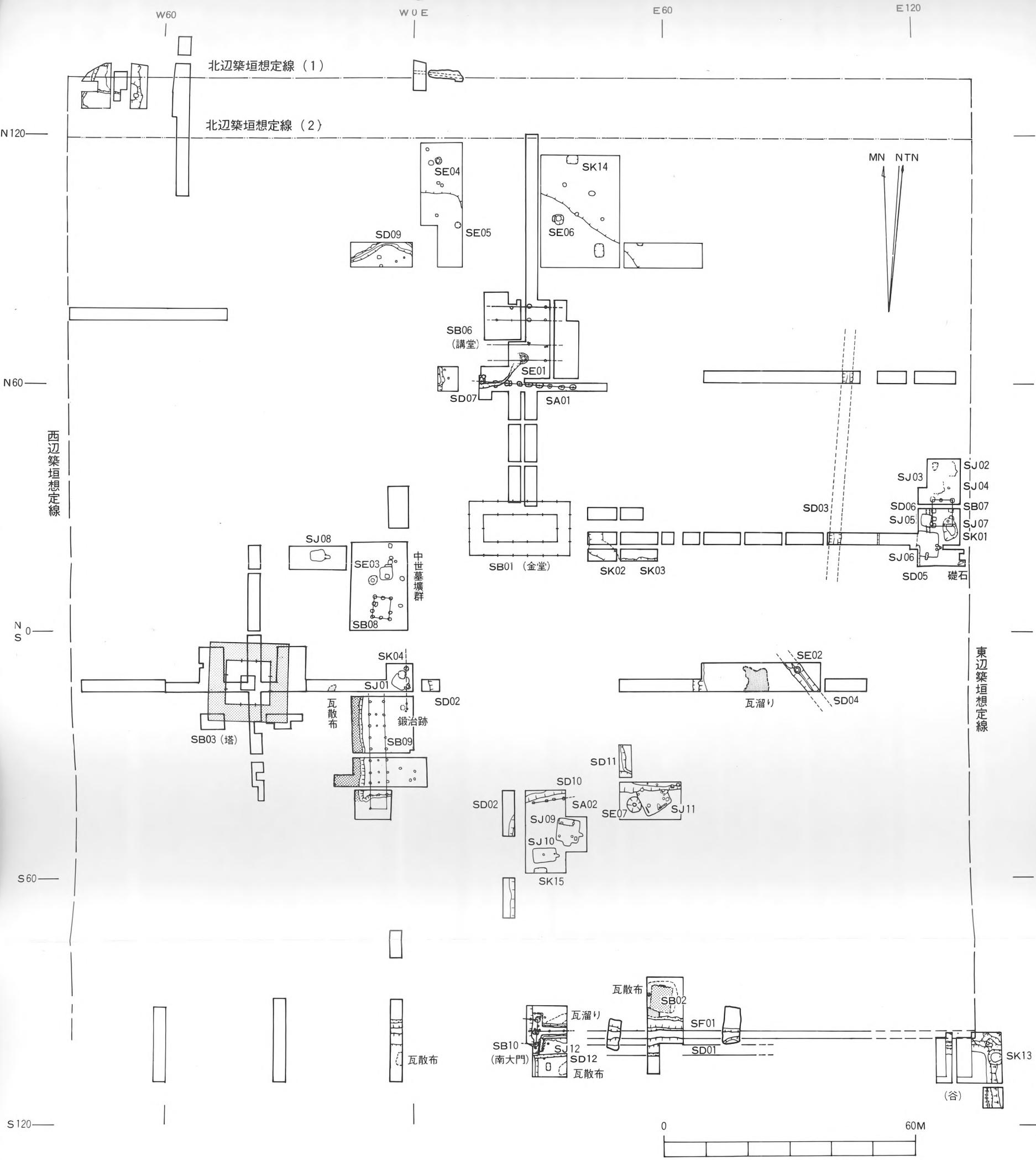


Fig. 4 遺構全体図 1/1,000

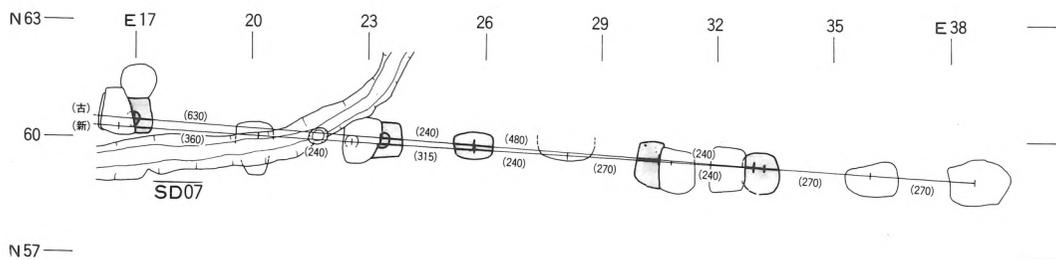
3. 第12トレンチ拡張調査

(1) 遺構

昭和56年度調査の第12トレンチのN58~60・E23~40の範囲で東西方向に並ぶ柱穴7個分を検出した。柱穴掘形は長径100~140cm・短径100~130cmの楕円形で深さ約40cmの椀状を呈し、埋土中に瓦と礫を含んでいる。柱痕・抜き取り穴は確認できず、また柱穴の南北の並びは確認できず一列のみであるとみられた。柱間は240~300cmで一定せず、方位はE-0°-Nで、さらに東西に延びるものとみられた。

今回はこの柱穴列(SA01)の東西への延長と南北方向への屈曲の有無の確認をすることを目的として、トレンチの拡張調査を行った。この付近は黄褐色ロームの地山まで攪乱が及んでおり、この面には凹凸が多く人頭大~一抱え大の礫が散在している。遺構検出面は標高127.9m付近である。

SA01 昭和56年度で検出した部分から西へはさらに2個の柱穴の続くのが確認されたが、道路と水路にかかるためそれ以上の延びの有無は不明である。東にはこれにつながる柱穴は検出されずN59・E39の位置にあるものが東端となることがわかった。また東端部分での南ないし北への屈曲は認められず、これが一本柱列である可能性が高くなった。N60・E23の位置の柱穴は、昭和56年度の調査で南東部分(全体の1/4)のみを検出していたが、この西にこれを切るように不整形形の柱穴のあるのが確認された。この掘形は125×95cmで検出面からの深さ65cm、埋土中には瓦片・木炭小片を含む。N59.8・E22.5に径30cmの柱痕とみられる部分がある。これに対して古い柱穴は南北110cmで方形状を示し、検出面からの深さ30cmで埋土中にはやはり瓦小片が混じる。N59.9・E23.3に柱痕または抜き取り痕とみられる部分がある。調査区西端のN60.5・E17付近で検出された柱穴も重複の状況を示している。西側の新しい柱穴は140×100cmの不整形形状を呈し、検出面からの深さ約60cmで埋土中には瓦片が混じり、また埋土上層の炭混黒褐色粘質土中には須恵器蓋・土師器坏などの完形品が数個体分含まれていた。柱痕または抜き取り痕は不明である。これに切られる古い柱穴は145×95cmで東西に長い方形を示し、検出面からの深さ45cmで埋土中には瓦片を含む。N60.4・E16.8に径30cm前後の柱痕ないしは抜き取り痕とみられる部



図中アミをかけた部分は古い柱穴を示す

Fig. 5 SA01模式図 1/200

分がある。以上の検出状況から SA01 のこの部分には造り替えのあったことが考えられ、古い柱穴は方形で浅い掘形をもち、柱間は現状で 630 cm を測る。これに対して新しい柱穴は、不整形ないしは不整楕円形で深い掘形をもち、柱間は現状で 600 cm 前後と推定される。この中間の N59.8・E20.1 には不整形形状の柱穴があるが、中央部分を SD07 によって切られているため重複関係は不明である。この SA01 の重複関係・柱間の間隔は Fig. 5 の通りである。なお、この西への延びについて確認するために水路の西側の N58~63.5・E 6~11 に拡張区を設定したが、ここでは柱穴は検出されなかった。このことから SA01 は E16.4 を西端とするか、またはさらに 1 間分延びて端部となることが考えられる。SA01 の性格については、講堂の南約 5 m の位置にあり、その東端柱穴の位置が推定される講堂の東端に近いことから、講堂に関するものかと考えられるが、方位を異にするなどの点もあり明確ではない。包含される遺物から新しい柱穴は平安時代前~中期のものともみられるが、古い柱穴については明瞭でない。

SD07 N61・E23 から緩い弧を描いて西へ向かう小溝が検出された。上部巾 85 cm・底部巾 30 cm 前後で、検出面からの深さは約 30 cm を測る。溝の底部には人頭大の礫・瓦片・板碑の大形片などが入っており、礫混褐色土の埋土中には瓦片・素焼きの土器片が含まれていた。この溝は昭和 56 年度の調査で検出された中世のものともみられる井戸 (SE01) から発するものであることが確認されている。

これ以外の遺構としては、水路の西側の拡張区で E 8 から西へ向って下がる南北方向の溝状の掘り込みが検出された。底部には拳大~小児頭大の礫が多数あるが、土器などは出土しなかった。これは寺域の中央部にあり、昭和 55 年度の第 10・11 トレンチで検出された南北方向の大規模な溝状掘込み (SD02) の北への延長部と考えられるが、底部が北に向って高くなっていることから、その北端に近い部分であるとみられる。

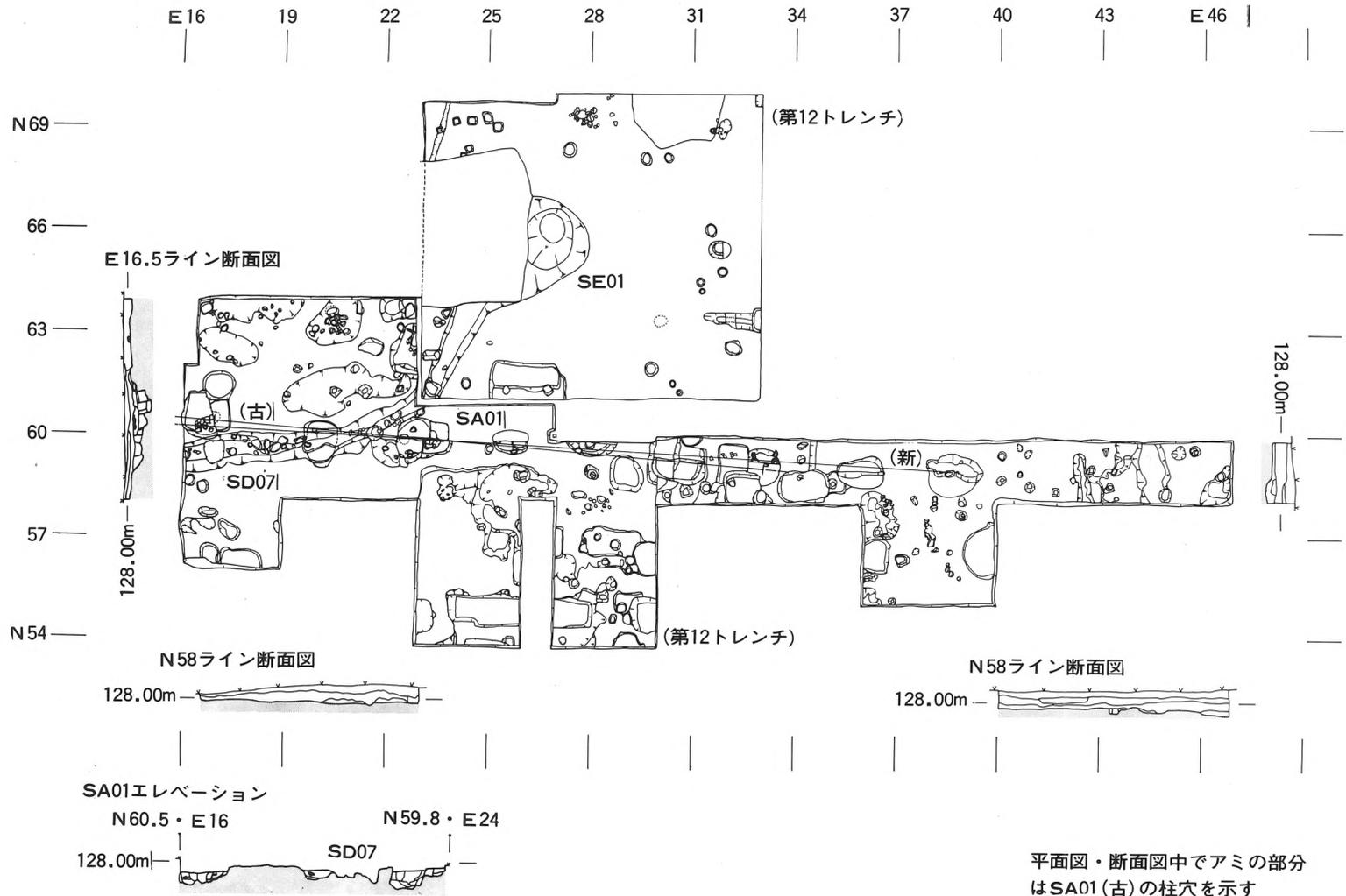


Fig. 6 第12トレンチ拡張調査区主要部 1/200

(2) 遺物

全体に遺物の出土量は少ないが、SA01の柱穴とSD07から土器・瓦片・石造品などが出土している。

SA01 西端の柱穴埋土上面から坏・皿・蓋・甕がまとまった状態で出土した。改築後の柱穴埋土最上層の炭混褐色粘質土の中に坏は上向きに、蓋はほぼ完形品がつまみを下にする状態で、また甕は大形の破片が散乱する状態であった。またこれとともに瓦片も出土している。出土の範囲は柱穴埋土内に限られており、SA01の改築の際に埋め込まれたものとみられる。

SD07埋土の礫混褐色土中には人頭大の礫とともに瓦片および磨滅の進んだ板碑・素焼きの鍋形土器片などが出土している。この溝が埋め戻される際に混入したものとみられる。

Table. 2 第12トレンチ拡張調査区出土遺物 (Fig. 7)

番号	種類	法 量 (mm)			胎 土		焼 成	色 調	成 形 ・ 技 法 等	図版 番号
		口 径	底部径	高 さ	素 地	挟 雑 物				
①	蓋	178		43	粗	黒色鉱物	やや軟	黄灰色 赤褐色粒子の付着	ロクロ成形、内面ロクロ目、内面口辺部から外面1/2にかけてヨコナデ、そこからつまみ前までヘラケズリ、つまみはヨコナデ	PL 13-1
②	蓋	182		37	やや粗	黒色鉱物	やや軟	外面灰色 内面暗灰色	ロクロ成形、内面ロクロ目、内面口辺部から外面口辺部にかけてヨコナデ、そこから外面1/2までにロクロ目、そこからつまみ手前までヘラケズリ、つまみはヨコナデ	13-2
③	蓋	196			やや密	白色鉱物 黒色鉱物	硬	灰 色	ロクロ成形、内面にロクロ目、内面口辺部から外面にかけてヨコナデ	
④	坏	130	70	35	粗	石 雲 雲 英 雲 母	軟	黄灰色	ロクロ成形、内面胴部から外面胴部にかけてヨコナデ、外面底部糸切り未調整 (右回転、円柱糸切り技法)	13-3
⑤	坏	126	76	33	やや粗	黒色鉱物	硬	灰 色	ロクロ成形、内面胴部から外面胴部にかけてヨコナデ、外面底部糸切り未調整 (右回転、内面に重ね焼きのあと)	13-4
⑥	坏	116	66	35	やや粗	褐色鉱物	やや硬	灰白色	ロクロ成形、内面胴部から外面胴部にかけてユビナデ、外面底部は糸切り未調整	
⑦	高台皿	140	76	30	やや粗	黒色鉱物	硬	表面は灰白色、断面は芯は黄灰色、そのまわりは灰白色	ロクロ成形、内面から外面高台にかけて水引き、外面底部は糸切り未調整、つけ高台	13-5
⑧	坏	116	84	35	粗	雲母小片	軟	赤褐色	内面胴部から外面口辺部にかけてヨコナデ、外面胴部はケズリ後ユビオサエ、外面底部ケズリ	13-6
⑨	坏		78		やや粗	黒色鉱物	硬	灰白色	ロクロ成形、内面と外面胴部にナデ、外面底部は糸切り未調整	
⑩	小型甕	120			密	白色鉱物	軟	褐 色	輪づみ、内面口辺部から外面口辺部にかけてナデ、外面胴部にヘラケズリ	
⑪	甕	202	52	263	やや密	雲 母 砂 粒	やや軟	赤褐色	輪づみ (10段以上)、内面胴部ヘラナデ、内面口辺部から外面口辺部にかけてヨコナデ、外面胴部上部横位ヘラケズリ、外面胴部下部縦位ヘラケズリ、内面胴部中程にユビアトが多い、胴部を欠く同一個体2点	13-7
⑫	甕	266			密	白色鉱物 黒色鉱物	やや硬	褐 色	輪づみ、コ字状口縁、外面胴部ヘラケズリ	

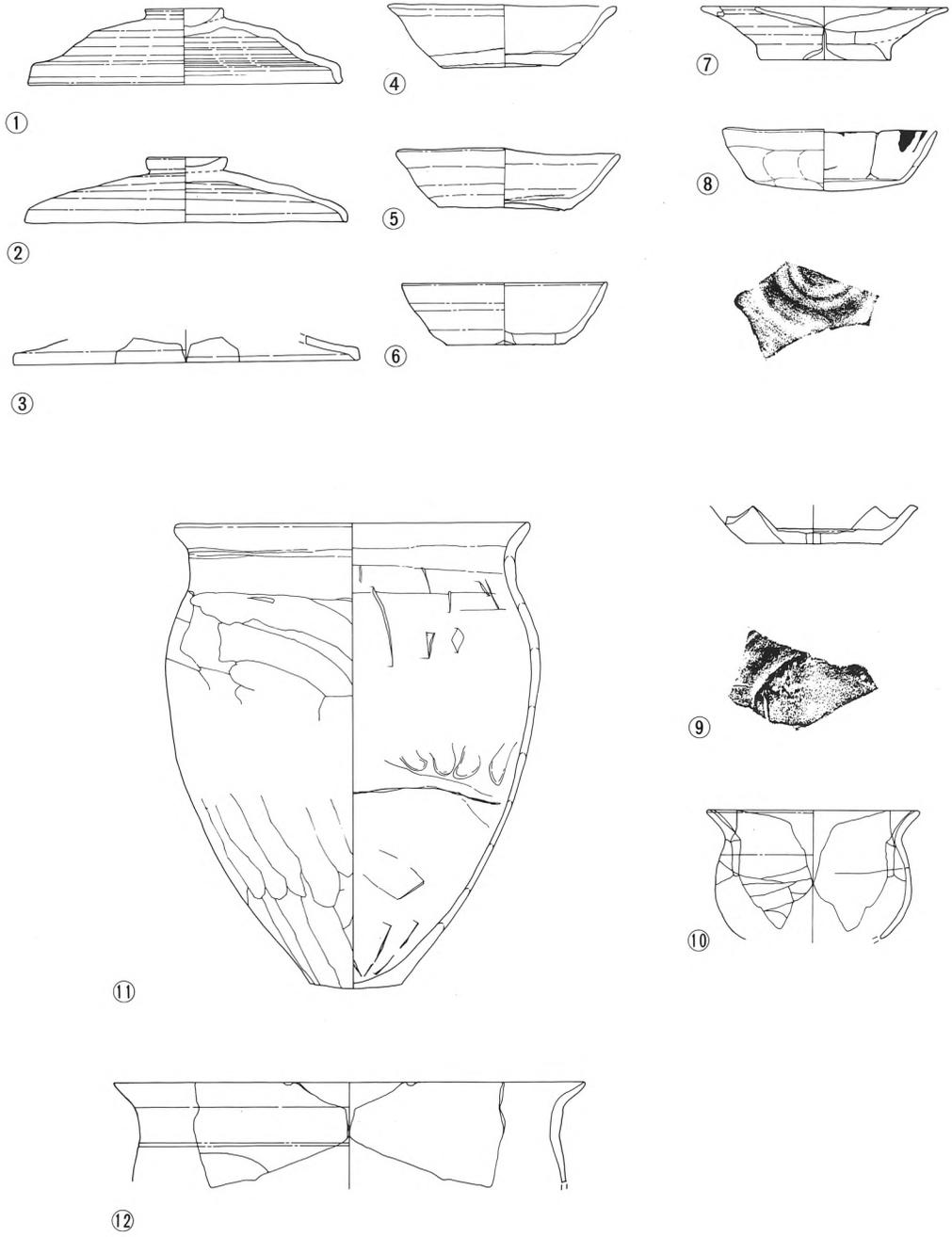


Fig. 7 第12トレンチ拡張調査区出土遺物 縮尺 1/4 ①~⑫ SA01 N60・E16柱穴埋土上面

4. 第20次調査

(1) 遺構

僧房の確認と寺域北半部の状況についての知見を得ることを目的として、金堂と推定北辺との間の調査を行った。昭和56年度調査の第12トレンチを挟んで東西となる位置である。

僧房については「上野国交替実録帳」金光明寺項に「萱葺僧房壹字長拾伍丈 広貳丈 高柒尺」とあって、長元3(1030)年には既に失われていたことがわかる。この建物は桁行15丈(45m)・梁間2丈(6m)の長細い規模のもので、萱葺であることから掘立柱建物であるとみられる。これにより推定復元したものがFig. 8である。また僧房のあった位置については、この史料によって講堂の東と西に南北方向の2棟が並ぶ復元図(Fig.33)が作成されているが、この史料には1棟分の記載のみがみえること、他の寺院跡では講堂の北側に東西棟が1棟である例の多いこと、などの点から講堂跡の北側に金堂の中軸線を中心として東西方向に22.5m ずつの位置(E3.3およびE48.3)が含まれる範囲に調査区を設定した。さらに東西方向に並列する場合も想定して、東西方向への拡張を行った。

調査区全体に礫混り灰色砂の地山まで削平が及んでおり、また家屋の基礎地業および土採り後の溜池などのために攪乱が著しい。このため建物の基壇あるいは礎石などは検出されず、また僧房跡とみられる柱穴の並びも確認をすることができなかった。国分寺の存続期間に該当する遺構としては井戸1基(SE04)を確認したのみである。一方、地山面には一辺20~40cmの方形および径30~40cmの不整円形の柱穴が多数あるのが検出された。これらは固くしまった地山を掘り込んでおり、ガラガラでもろい砂混褐色土で埋まっていた。この中に包含される土器から、中世~近世の掘立柱建物跡とみられるが、建物としてのまとまりはつかみ難く、どのような規模と性格をもつものかは不明である。また、これとともに中世に属するとみられる井戸2基と土壇1基、溝を確認した。

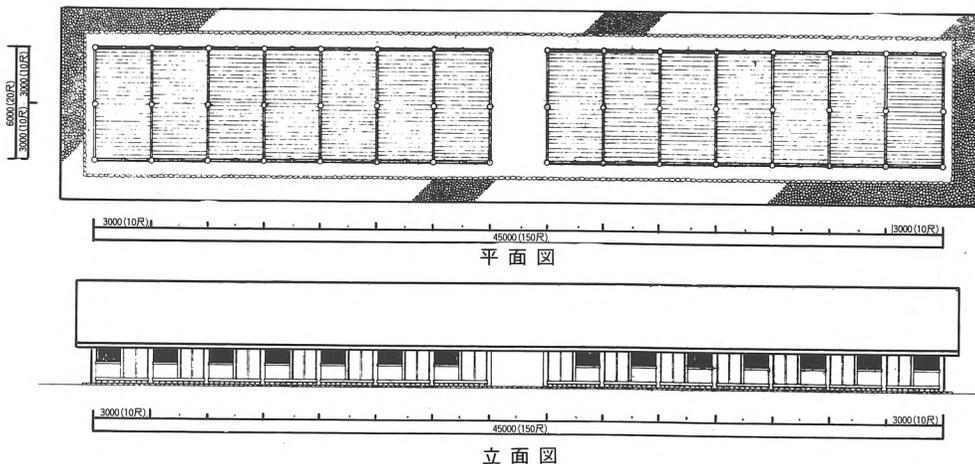
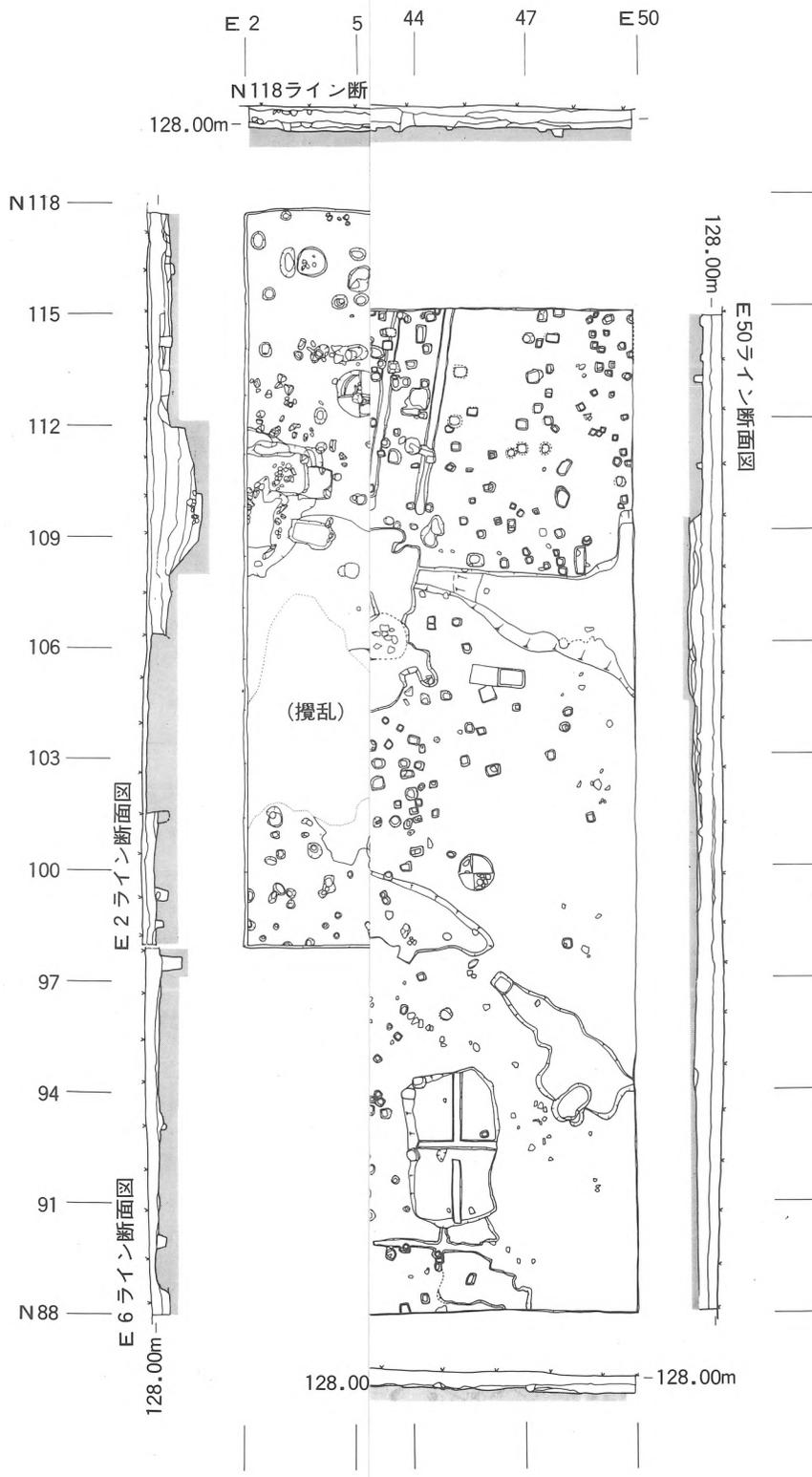
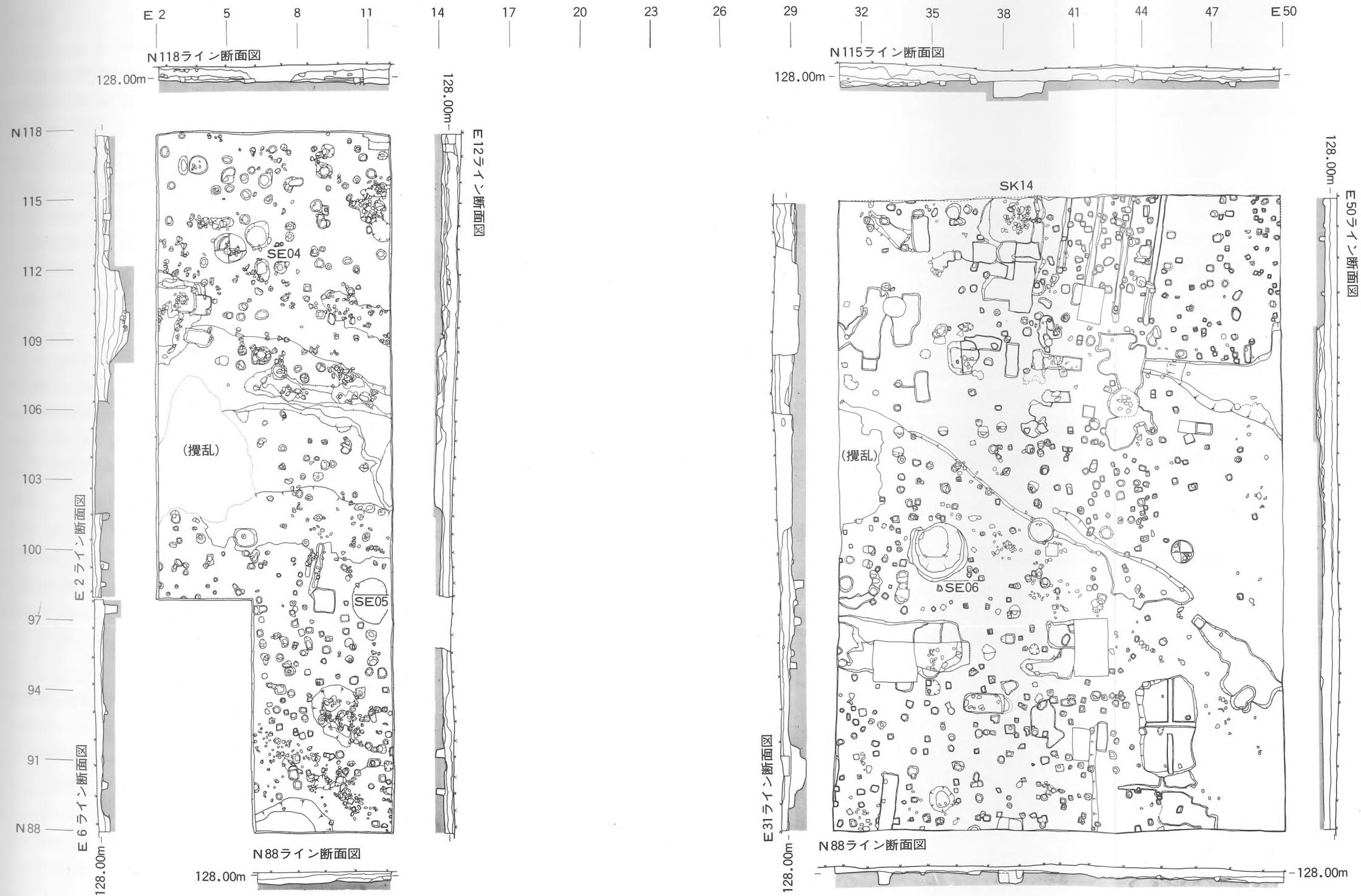


Fig. 8 僧房推定復元図 1/400 (「史跡上野国分寺跡整備基本計画」による)



この部分は地山 (礫混り灰色砂) を示す

Fig. 9 第20次調査



断面図のアミの部分は地山（礫混り灰色砂）を示す

Fig. 9 第20次調査区主要部 1/200

SE04 N 113・E 6で小礫混り灰褐色砂の地山面（標高127.8m）を掘り込む状況で検出された。掘形上部は隅丸の不整形を呈し、本体部分は径70～90cmの円形でほぼ垂直に掘り下げられており、検出面から370cm以下では径50cmと狭くなる。深さは550cmで、480cmの位置（標高123m）から湧水がみられた。底の中央部が径10～15cm・深さ約10cmで掘り下げられている。埋土は砂混り暗褐色土を主体とし、人為的な礫の埋め込みおよびヘドロ・粘土などの堆積はなく、地山の崩落と表土層の流入による自然堆積とみられる。遺物は、井戸枠などの構造物は残存しておらず、埋土中からも土師器の小片と瓦片を少量出土したのみである。上部の形状からみて当初の掘込み面はかなり上にあったものとみられる。周囲に小柱穴が多数あるが、この井戸に伴うものは確認できない。存続期間は、出土遺物からみて平安時代であるとみられる。

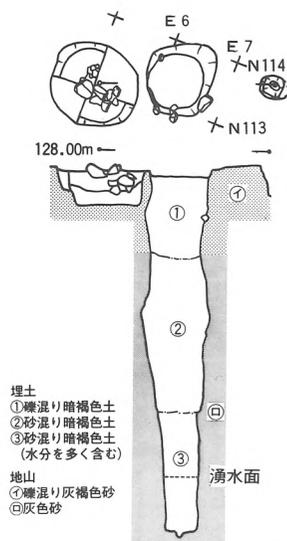


Fig.10 SE04断面図 1/80

SE05 N98・E11で地山面を掘り込む状況で検出された。断面は漏斗状の形状をもち、上部は径約150cmの円形で、検出面下約120cmでは径60cmとなる。上部は拳大～人頭大の礫で埋められており、この中から素焼きの鍋型土器片などが出土している。未完掘のため深さは不明。

SE06 S 100・E35で地山面を掘り込む状況で検出された。断面は段のついた漏斗状を呈し、上部径は約250cmの円形で検出面下約120cmでは径約100cmとなる。上部には拳大～人頭大の礫が密集しており、この中に素焼きの土器片、石臼などが混じっていた。西側部分は長方形の土壌によって切られている。SE05に近い時期のものとみられる。

SK I 4 調査区の北端N 114・E39で地山を掘り込む状況で検出された。東西約220cm・南北200cm（北側は調査区外に延びる）の方形を呈し、深さ50～70cmで底部には人頭大の礫が密に散布する。この中に石臼・素焼きの土器片が少量混じる。遺構の性格は不明である。

SD09 西側に拡張したN89～94・W 0～15の範囲で、南東から北西に向かいN95・W 6で鈍角に曲がって南西に向かう、「く」形に屈曲する溝を検出した。小礫混り灰褐色砂の地山を掘り込み上部巾100～200cm・底部巾50～120cmで深さ20～50cm、東から西に向かって僅かに低くなっている。底部近くには拳大～径30cm大の礫が多く散布し、この中に瓦片・素焼きの鍋型土器片などが混じる。この溝の南側には一辺20～50cmの方形の柱穴が多数あるが、建物としてのまとまりは確認できない。区画をするための溝とみられるがE 6以東ではこの延長は検出されず、性格は不明である。

この寺域北半部は北西から南東に向かったの流水の痕がみられ、またこれによる砂礫の堆積がみられる。小柱穴の多くはこの砂礫層の下から検出されたが、この上面で検出されたものもある。この流水がどの時期からあったものかは不明であるが、国分寺存続期の遺構・中世の遺構もあることからして、現在認められる痕と堆積は近世を中心とする時代のものではないかとみられる。寺域北半部は地形的に流水の影響をうけやすかったことに注目される。

(2) 遺物

全体に地山まで攪乱が及んでおり、遺物の出土も遺構に伴うものは少なく、表土中からのものが多い。また国分寺存続期に属するものは少なく、中世～近世の遺物の多いが目立つ。

SE04の埋土からは土器・瓦の小片が少量出土したのみであるが、基壇化粧などに使用されていたものとみられる角閃石安山岩切石(40×27×14cm)が1点出土している。SE05の礫混りの埋土中からも内耳埴型土器片とともに角閃石安山岩切石の破片が出土している。SE06の埋土からは内耳埴型土器片が出土している。地山上に堆積する砂礫層中からは素焼きの土器片とともに、灯明皿片が多数出土している。この土砂を伴う流水の時期についてより詳細な検討を行う上で注目される資料である。

Table. 3 第20次調査区出土遺物 (Fig. 11)

番号	種類	法 量 (mm)			胎 土		焼 成	色 調	成 形 ・ 技 法 等	図版番号
		口 径	底部径	高 さ	素 地	挟 雑 物				
①	内耳埴	318	198	138	やや粗	白色鉱物	やや軟	外面黒灰色 断面黄褐色	輪づみ、内面胴部から外面胴部にかけてナデ	
②	内耳埴	300			やや粗	白色鉱物 黒色鉱物	やや硬	灰白色	ロクロ成形、内面口辺部から外面口辺部にかけてヨコナデ	
③	内耳埴	364			極めて粗	石 英	軟	黒 色	内面胴部にナデ、内面口辺部から外面胴部にかけてヨコナデ	PL 14-1
④	内耳埴	320	304	55	粗	砂 粒	やや軟	外面黒色 内面灰白色	輪づみ3段、全体にヨコナデ	14-2
⑤	すり鉢		231		密		硬	表面えび茶色の釉 断面褐色	ロクロ成形	
⑥	大 甕	398			やや粗	雲母細片	やや硬	外面黒色 断面灰褐色	ロクロ成形、内面にロクロ目が残る、外面にはヨコナデ	
⑦	灯明皿	134	80	43	密		やや軟	黄褐色	ロクロ成形、内面底部にヨコナデ内面底部と胴部の境目付近にユビナデ、内面胴部から外面胴部にかけてヨコナデ、外面底部は糸切り未調整	
⑧	灯明皿	120	80	23	密		やや軟	黄褐色	ロクロ成形、内面底部の中心付近にユビナデ、内面底部から外面胴部にかけて横ナデ、外面底部は糸切り未調整	
⑨	灯明皿	106	54	17	密		硬	内面・外面の一部に 茶色の釉 断面灰色	ロクロ成形、全体にヨコナデ	
⑩	灯明皿	102	55	19	密		硬	内面・外面の一部に 茶色の釉 断面灰色	ロクロ成形	
⑪	灯明皿	86	60	17	密		やや軟	灰褐色	ロクロ成形、内面にユビナデ、外面口辺部から底部にかけてロクロ未調整、外面底部は糸切り未調整で、木目痕が残る	
⑫	灯明皿	86	55	20	密		やや軟	灰褐色	ロクロ成形、内面底部から外面胴部にかけてヨコナデ、外面底部は糸切り未調整	
⑬	灯明皿	70	45	19	密		やや硬	黄褐色	ロクロ成形(左まわり)、内面底部から外面胴部にかけてはロクロ未調整、外面底部は糸切り未調整	14-3
⑭			90		やや粗	褐色細粒	硬	黄褐色に薄紫色の釉	ロクロ水挽き成形 つけ高台	14-4
⑮	灰釉陶 底部		68		密		硬	乳白色	ロクロ成形、全体にナデ、高台の3ヶ所を指で内側に押す	14-5

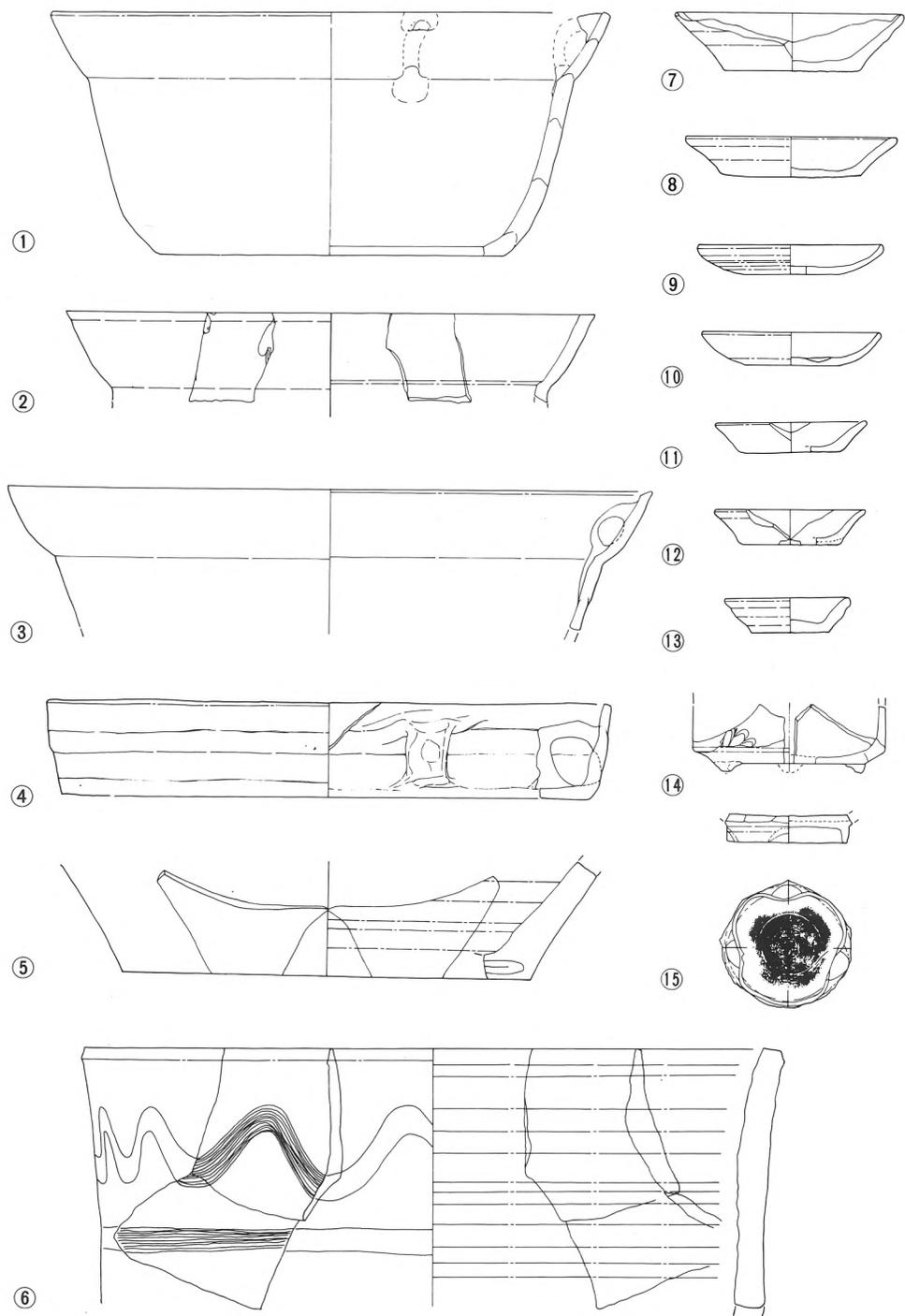


Fig. 11 第20次調査区出土遺物 縮尺 1/4

①SE05埋土 ③SE06埋土 ⑧N94・E7柱穴埋土
 ⑬N96・E6柱穴埋土 ②・⑦・⑪・⑫・⑮砂礫混褐色土
 ④・⑤・⑥・⑨・⑩・⑭表土

5. 第21次調査

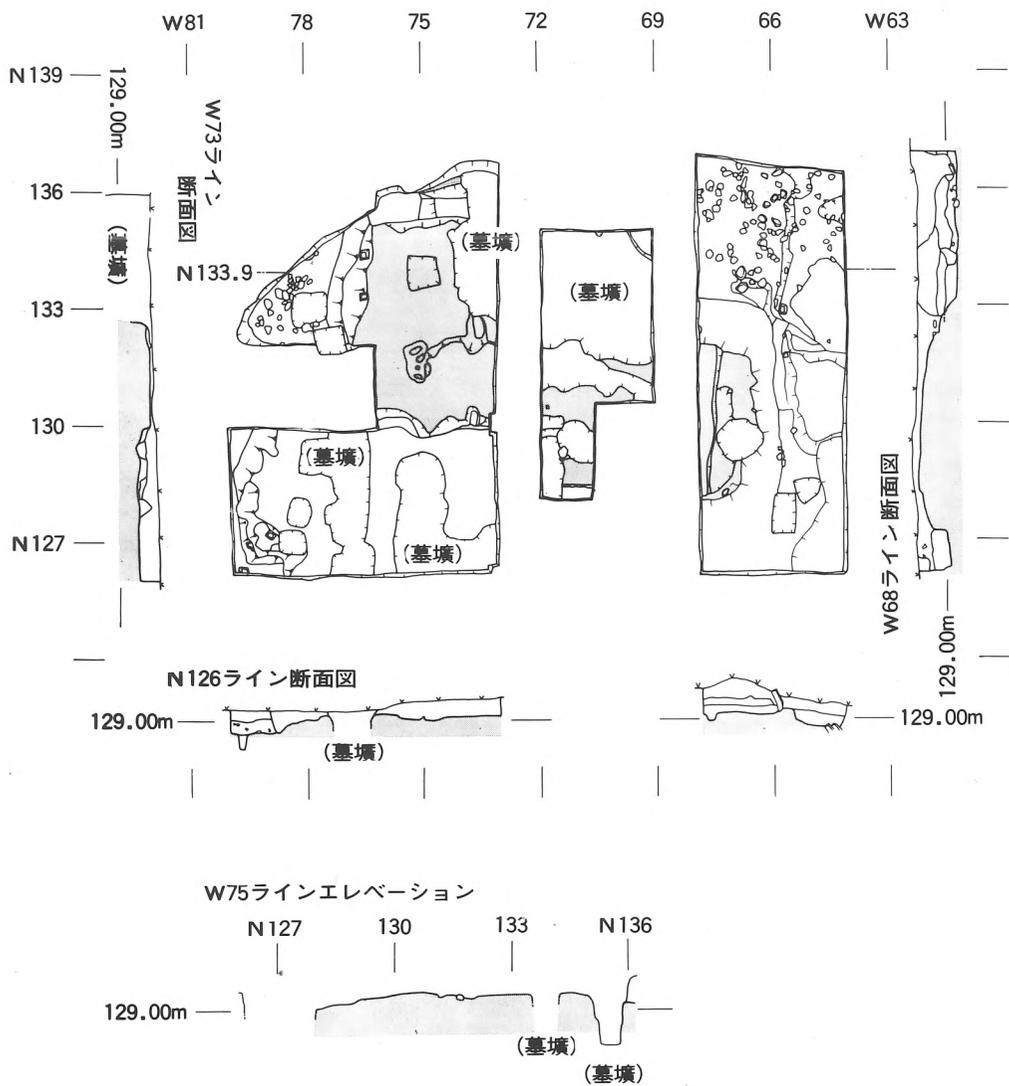
(1) 遺構

寺域北辺築垣の確認のため、史跡地北西隅にある墓地跡の発掘調査を行った。北辺築垣の位置については、「上野国交替実録帳」金光明寺項の記載から、現在史跡地北側の町道付近に想定されるが、(1)金堂中心から北へ109m(1町)の位置、(2)南辺築垣から北へ218m(2町)の位置、の2つの可能性が考えられてきた。そのためこれまでに第6・8・12トレンチによる調査が行われてきたが、地山まで攪乱が及んでいるためもあって遺構の確認はなされなかった。それに対し南北約11m・東西約16mの墓地の一角は周辺より50cm前後高い地形を示しており、金堂中心から109mの線(N133.9)がこの中を通るため、北辺築垣の遺存する可能性が期待された。

発掘調査に先行して、墓の移転に際して立ち合い調査を行ったが、その観察によると表土は極めて薄く、地山は砂質土で地表下2.5mまでは同質であること、相当部分が宝永年間以来の墓壇のために掘り返しをうけている状況を認めた。発掘調査では、表土は褐色砂質土で最も薄い箇所では12cmで直ちに灰色砂の地山となり、調査区全域で地山まで攪乱の及んでいることがわかった。そしてN128から南、W67から東ではこの地山が40~80cm削平されていることが明らかとなった。周辺に流水の痕などは見えないため、この削平は主に耕作によるものであろう。

北辺築垣 北部築垣の築土についてはその痕跡を見出すことはできなかったが、W73~76の間で地山がN130を境に北側が約15cm高くなる段差のあるのが認められた。これをW75ラインの標高でみるとN129.2=129.30m—N129.8=129.40m—N131=129.44mである。そしてN135で129.34mとなるが、墓壇を隔ててN136では129.17mとなりさらに北に向かって急に下がっていく形状を示している。このことから、この段差は地山を削り出して造った北辺築垣の基部の痕跡である可能性が考えられた。しかしW68ラインでみるとN128で同質の地山が129.52mであり、この段差より南側でより高い位置にあることから、地形が東に向かって高くなっていたことを想定しないと問題は残る。N136から北に向かって地山が下がっていくことについては、その先が町道となっているためにこれが人為的な削り出しであるか否かを確認することはできないが、町道が耕作による削平はうけないにもかかわらず一段下がった位置にあり、もともとはさらに低かったとされることから、古くからの形状であると推定される。以上のことから北辺築垣は、(1)南辺築垣から218mの位置であるN119.4では何等の遺構も見出せないこと、(2)金堂中心から109mの位置であるN133.9付近でも顕著な遺構は残存していないが、N136から北が地形的に低くなっていること、(3)その他第8トレンチのN135~136で検出された中世~近世とみられる東西方向の石列の存在、(4)東国分の集落の南側への伸張が西半部ではN136ラインより北にとどまっていること、などを考慮すると、確証は得られなかったものの、N133.9付近にあった蓋然性が高いとみてよい。

N133~137・W64~68では削平をうけた面に拳大~人頭大の礫が多数並べられるようにしてあったが、これは意図的な敷き込みとはみられず、時代的にも新しいものである。



アミの部分は灰色砂地山層

Fig. 12 第21次調査区全体図 1/200

(2) 遺物

近年まで墓地であり、墓壙が繰り返し掘られ、また表土が非常に薄いため遺物の出土量は少なく、さらにこれらは墓の埋納物あるいは供物用のものであった可能性が高い。

この中で、国分寺に関係するものとしては羽釜の口縁部の破片1点があるのみである。また柱目される遺物としては、地山の灰色砂上面から出土した素焼きの皿の破片がある。この内面底部には墨で文様が描かれ、この墨線の中に朱色の塗彩が施されている。全体の図柄は不明であるが、絵が画かれていたものとみられる。これに類したものは塔跡の表土から1点出土しており、伊勢崎東流通団地遺跡の井戸からも素焼きの皿の内面底部に墨と朱色で、柄杓を持つ男子を描いたものが1点出土している。国分寺廃絶後の状況を知る上で興味深い資料である。

Table. 4 第21次調査区出土遺物 (Fig. 13)

番号	種類	法 量 (mm)			胎 土		焼 成	色 調	成 形 ・ 技 法 等	図版番号
		口 径	底 部 径	高 さ	素 地	挟 雑 物				
①	大 甕	336			密		硬	釉のかかる部分は透明の深緑色、それ以外の表面は茶色で縞になっている、断面はうす茶色	ロクロ成形、釉には貫入が目立つ それ以外の表面はロクロ目が残っている	PL 14-8
②	皿		82		やや粗		やや軟	黄褐色	ロクロ成形、内面底部から胴部にかけてミガキ、外面胴部にユビナデ、外面底部は糸切り未調整、内面に墨と朱で絵が描かれている	14-9
③	ぐい呑	76	42	35	やや粗		硬	全体に緑色の釉がかかる 胎土ははだ色	ロクロ成形、釉のかかっている部分は透明の緑色で黄土色の斑点あり、かかっている部分にははだ色 釉のかかっている部分は貫入が目立つ	14-6
④	羽 釜	216			粗	白色鉾物	やや軟	灰褐色	ロクロ成形	
⑤	皿		138		密		焼き 締り	表面にアメ色のうわぐすりがかかっている、内面は青色で絵が描かれている 断面は灰白色	ロクロ成形、つけ高台、トチン痕 2ヶ所	14-7

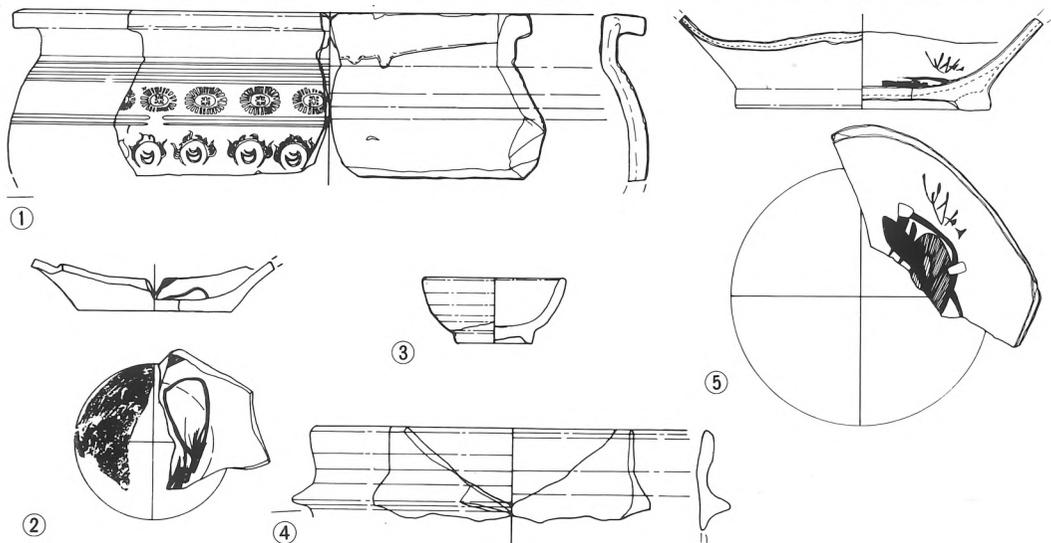


Fig. 13 第21次調査区出土遺物 縮尺1/4 ①・③・④・⑤ 表土 ② 灰色砂上面

6. 第22次調査

(1) 遺構

先年度の第17次調査での所見にもとづき、中門および南面回廊の確認を目的として、金堂の南方での調査を行った。ここは金堂跡の南側にある畑地が南に向って一段低くなる場所で、第17次調査で検出された西面回廊の可能性をもつSB09の南端を東側へ屈曲させた線上にあたる位置である。また金堂中軸線を中心としてSB09を東側に折り返した線(E58.8~62.2)と南面回廊推定地の交点を中心に東部拡張区を設定した。

調査区のS47から南では暗黄褐色ロームの上に自然堆積とみられる軽石混黒色土がうすく堆積しているのが認められた。しかしS47から北ではロームが北西に向かって低くなっており、表土中にローム塊が多く混じっていることからかなりの攪乱を受けていることは明らかである。E27ラインの標高でみると、S59=127.6m—S50=127.55m—S47=127.5m—S42=127.2m、S43ラインではE37=127.7m—E33=127.6m—E30=127.5m—E27=127.3mとなる。

中門は金堂の南でS40・E25.8を中心とする位置にあると推定され、西半部はE27から西にかけてある溝状の掘り込み(SD02)のために滅失しているが、東半部が遺存している可能性が考えられた。発掘調査の結果、この位置は地山までの削平が進んでおり、東西方向の溝(SD10)とそれに並行する柱穴列(SA02)が検出されたのみで、中門の基壇および化粧材、礎石、根石、また柱穴掘形・両落ち溝などの遺構は検出されなかった。

南面回廊についても調査区域内ではその遺構を検出することはできず、SB09と同等の柱穴列についても確認をすることができなかった。

東部拡張区では全面に南北方向の耕作溝があり、灰黄色ロームの地山まで削平が進んでいた。部分的にその上に軽石混黒色土が薄く残っていた。この地山の変化をE50ラインの標高でみるとS46=127.95m—S42=127.95m—S40=127.85mでこの北では溝状の掘り込み(SD10)となる。西部調査区に比べ約30cm高く、全体的に平坦である。ここにおいても南面回廊および東面回廊と認められる遺構は確認されなかったが、調査区北東隅のSD10の南斜面にかかって60×60cm前後で一面がほぼ平坦な安山岩の自然石が検出された。これらは形状からみて礎石であると判断されるが、南大門のものに比べて小型であり、その出土位置からみて回廊に使用されたものである可能性が強い。

検出された遺構は、古墳時代後期の竪穴住居2軒(SJ09・10)、中世～近世の東西方向の溝状掘り込み(SD10)、それに並行してある柱穴列(SA02)、時期不明の方形土壇1基(SK15)である。これ以外に径30cm前後の円形柱穴が数個検出されているが、国分寺に直接関係するものは確認されない。また東部拡張区で検出された遺構は、古墳時代後期の竪穴住居1軒(SJ11)、未完成の井戸1基(SE07)、東西方向の溝状掘り込み(SD10)であり、国分寺に直接関係するものは確認されなかった。

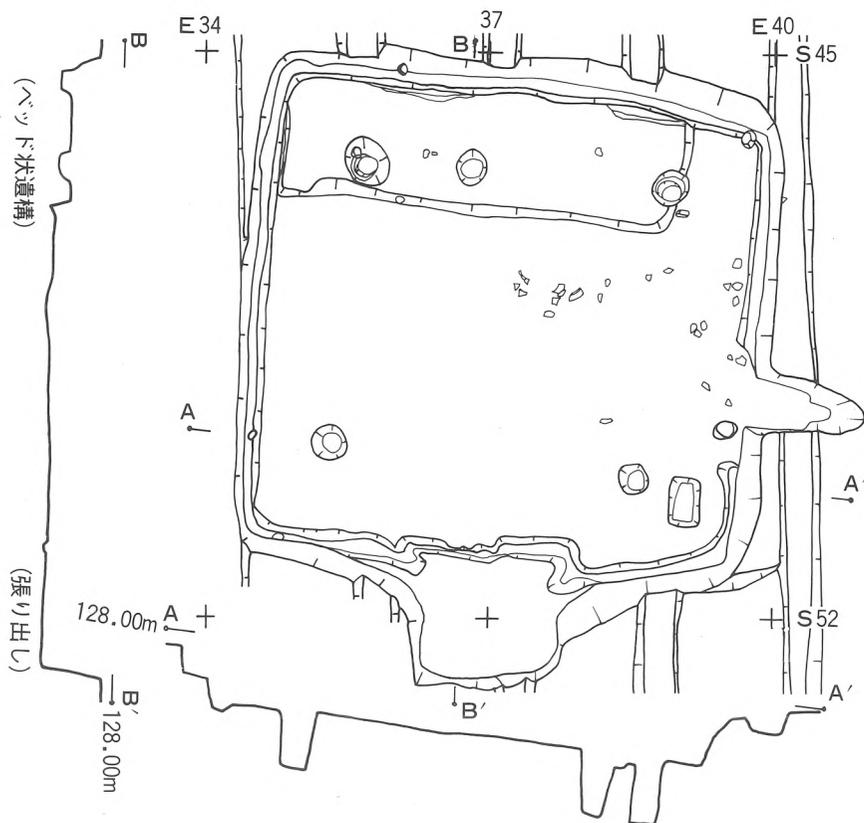


Fig. 14 SJ 09 1/80

SJ09 S49・E37を中心とする位置の、軽石混黒褐色粘質土面で検出された。耕作溝のため西側壁と東側壁の一部、カマドの中央部を破損しているが、残存状態は良好である。規模は東西570cm・南北560cmで、ほぼ方形である。方位はE-2°-Sで、調査軸線に対しては6°の振れを示す。検出面から床面までの深さは約60cmで、床面はローム層中に造られ、僅かな凹凸はあるがほぼ平坦で固くしまっている。壁は垂直に近い立ち上がりを示し、直下には巾10~15cmの溝がまわっている。柱穴は4個が検出されたが、径約40cmの円形で深さは約60cm、柱間は南北方向が300cm前後・東西方向が330cmを測る。また北側の柱の並びの北西柱穴から115cm東に寄った位置に径30cm・深さ14cmの小形の柱穴1個が検出されている。カマドは東壁中央のやや南寄りに造られており、焚口の両側には土師器甕を倒立させた構造である。内部は上部から崩落した状況を示し、底部近くには焼土塊が含まれている。壁体の焼化はあまり進んでおらず、全体に焼土の量も少ない。カマドの南側に50×30cmの長方形で、深さ70cmの貯蔵穴がある。この住居の特徴的なこととして、南壁側中央部に巾220cm・奥行120cmの張り出しが造られている。床面は住居部分と同一面で柱穴などはないが、住居南壁下の溝が張り出し部分では内側に約20cm「コ」字型に屈曲している。覆土は張り出し部分と住居部分とは一連である状況を示していることから、これが住居址の廃棄される時期には一体としてあったものとみられる。また住居の北側壁に沿って長さ420cm・巾120cmで、床面からの高さ約20cmの長方形のベッド状の高まりが設けられている。これはロームを削り出して造られたもので、上面は平坦であり、顕著な造作および遺物の出土は認められな

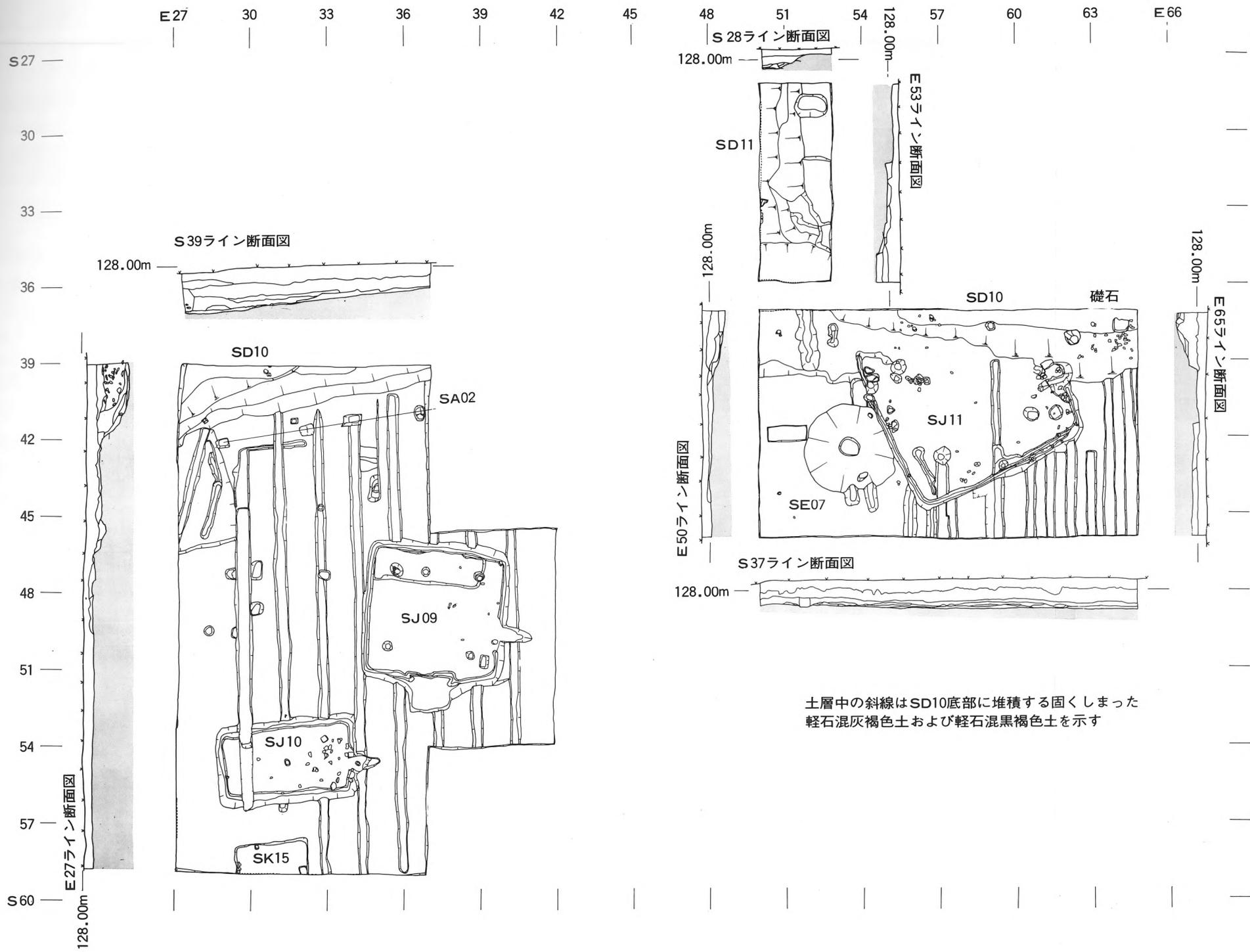


Fig. 15 第22次調査区全体図 1/200

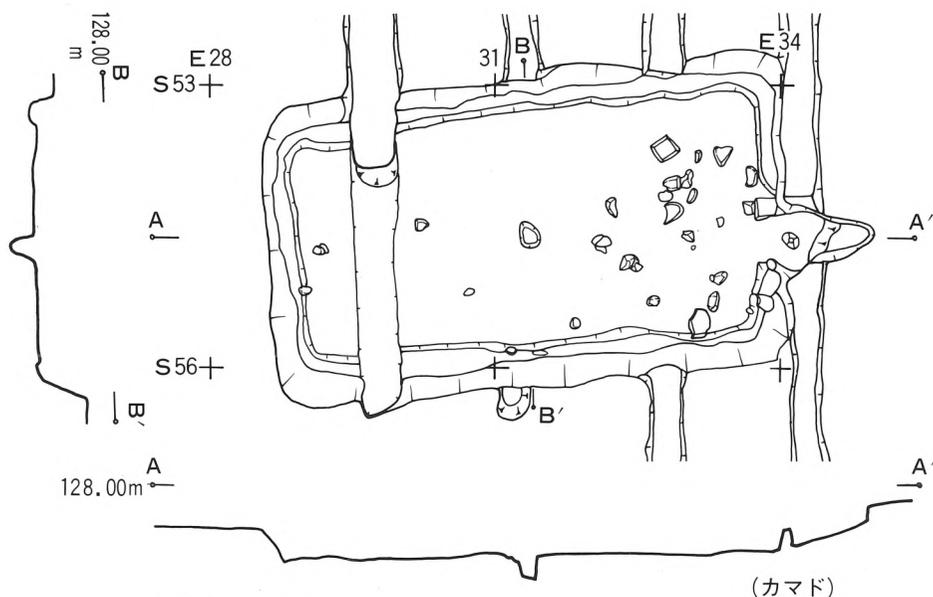


Fig. 16 SJ 10 1/80

い。出土遺物からみて、古墳時代後期のものとみられる。

SJ 10 S55・E32を中心とし、SJ 09の南西約2mの位置で、軽石混黒色粘質土面で検出された。耕作による攪乱をうけているが、残存状態は良好である。規模は545×330cmで、東西に長い方形である。方位はE-9°-Nで、調査軸線に対し5°の振れを示す。検出面から床面までの深さは約50cmで、床面はローム層中に造られ、ほぼ平坦で固くしまっている。壁は30°前後の角度で立ち上がっており、直下には巾約20cmの溝がまわっている。柱穴は床面中央に20×30cmの楕円形で、深さ25cmのもの1個が確認されたのみである。カマドは東側壁のやや南寄りに造られており、焚口は巾50cmで中央部には砂岩の支脚が据えつけられている。またカマド手前の床面上から砂岩切石が出土しており、これらを用材とした構造であったものとみられる。カマド近くの床面上には土師器甕の破片とともに拳大～小児頭大の礫が散在していた。この住居は出土遺物からみて古墳時代後期のものとみられるが、SJ 09と同時に建てられていたかについては不明である。

SJ 09および10の周囲には、これに伴うとみられる柱穴などの遺構は確認できない。

SJ 11 東部拡張区のS40・E58を中心とする位置で、軽石混黒色粘質土面で検出された。北側1/2はSD10によって壊され、また西側壁の中央部分は井戸(SE07)によって切られている。規模は740×(660)cmで、やや東西に長い方形である。方位はE-28°-Nで、調査軸線に対し24°の振れを示す。検出面から床面までの深さは約45cmで、床面はローム層中に造られ、小さな凹凸はあるがほぼ平坦で固くしまっている。壁は25°前後の角度で立ち上っており、直下には巾10~15cmの溝がまわっているが、南壁の東半部分では平行する2条が検出されており、南西隅にも西側壁に沿って長さ200cmで平行する溝がある。柱穴は50×60cmの楕円形で深さ約90cmのものが各隅近くに4個、南側壁中央に接するように40×30cmの楕円形で深さ約50cmのもの1個が検出された。

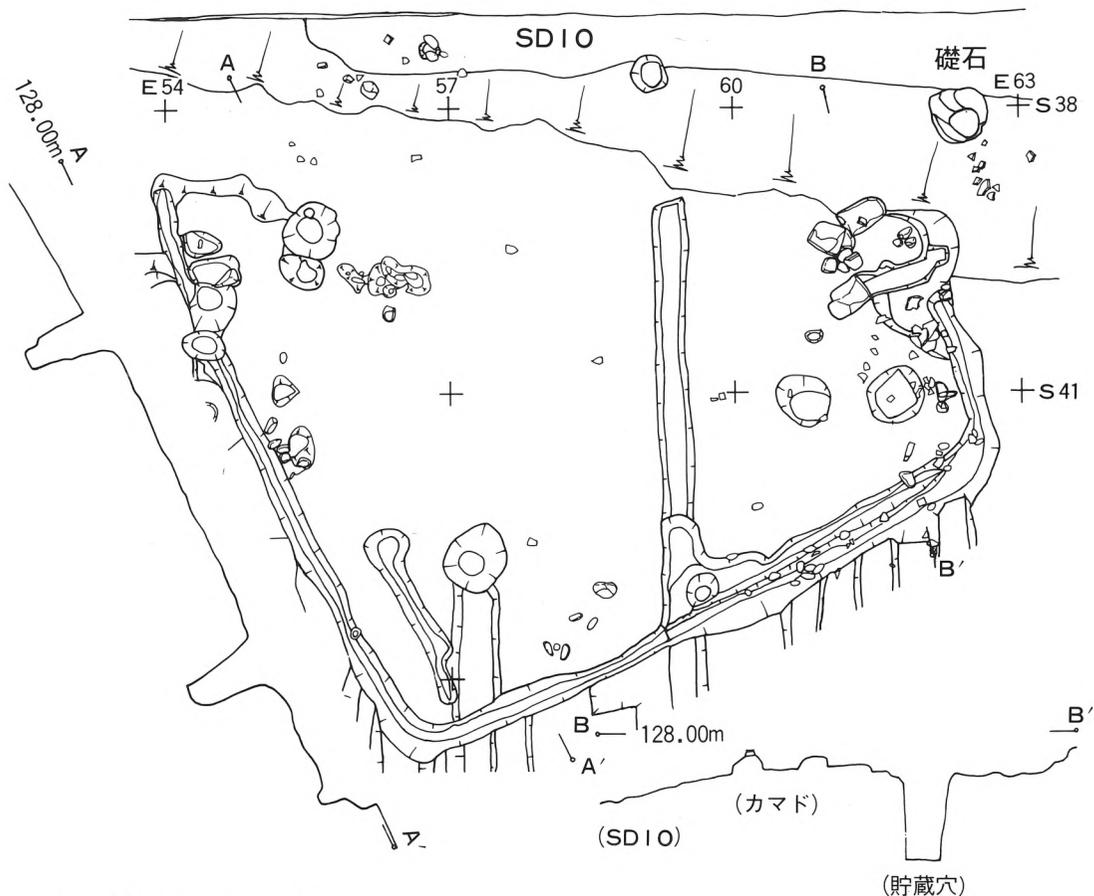


Fig. 17 SJ 11 1/80

SD10で切られた北側壁中央と推定される位置にも残痕が認められる。柱間は東西が390cmと420cm、南北が390cm、支柱間は635cmを測る。カマドは東側壁の中央からやや南寄りに造られており、焚口は巾45cmで砂岩切石を組んだ構造とみられるが袖石が現状をとどめる以外は崩落した状態であった。カマドの南側に一辺50cmの方形で深さ95cmの貯蔵穴があり、この周辺には土師器甕の破片が散乱していた。また南側壁および西側壁近くの床面上から、土師器環、須恵器提瓶の破片などとともに、長さ15cm程の細長い自然石が多数出土した。この住居は今回調査された3軒の中で最も大きな規模のものであり、南・北側壁近くに支柱穴をもつこと、壁溝の内側に平行する小溝の設けられている部分のあることなどに構造的な特徴が認められる。出土遺物からみて古墳時代後期のものとみられる。

SEO7 東部拡張区のS42・E53を中心とし、SJ11の西側壁を切る状況で検出された。上部径350cmで、断面は漏斗状を呈するが、検出面下125cmで径80cmと狭くなり、それより下はほぼ垂直に25cm掘られて底部となる。この形状からこの井戸は未完成のまま作業を中断したものとみられる。南側斜面の中位に20×35cmの平坦部分が検出されたが、作業用の足場であったものとみられる。埋土はローム塊を多く含む黒褐色土を主体とし、堆積の状況から東西両方から人為的に埋められたことが認められる。埋土中には僅かであるが土器片が含まれている。時期については

中世のものである可能性が考えられるが確実ではない。

SD10 調査区の北端でS40ラインから北に向って掘り込まれた溝が検出された。E34から西では南に向ってラップ状に開く形状を示しているが、これは昭和55年度の第10・11トレンチの調査で確認された寺域中央部の南北方向の溝状の掘り込み (SD02) に取りつくためとみられる。掘り込み

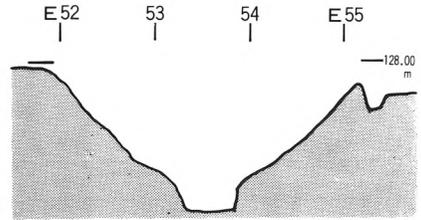


Fig. 18 SE07断面図(S42.5ライン)1/80

みはローム面で確認され、検出面からの深さはS39・E37で約110cm、底面は標高126.1mとなる。底部には固くよくしまった軽石混暗灰褐色土が貼りついた状態であり、その上部には多量の拳大の礫、瓦片、素焼き土器片、それに馬骨を含む暗褐色土が厚く堆積している。またS41・E28の溝南岸肩部からローム層にくい込むように五輪塔の火輪が1個出土した。東部拡張区でもS39ラインから北に向って掘り込まれた溝が検出された。ローム層の上の軽石混黒褐色土からの掘り込みが認められ、SJ11の北半部分を切って造られている。断面は浅い椀状を呈し、検出面からの深さはS37・E65で約80cm、底面は標高127.15cmとなる。底部には固くしまった軽石混暗灰褐色土、その上にやはり固くしまった軽石混黒褐色土などが堆積する。この中には瓦片が含まれている。この溝はその位置と方位、堆積の状況からSD10の東方への延長部分であると判断される。この溝の規模を確認するために北側へ拡張して調査を行ったが、その結果では巾は現状で約5mであることがわかり、またE51から西に向って掘り込まれ、SD10と直角に交わる南北方向の溝状の遺構 (SD11) が検出された。SD10の方位は調査軸線にほぼ一致し、底面はほぼ同じ高さであり西端部で西に向って落ち込む形状を示す。出土遺物から中世～近世のものとみられるが、流水による砂礫層の堆積がみられず底部に踏み固められたような薄く固い層が形成されていることから、通常は通路として使われていたことが考えられる。国分寺廃絶後の状況を知る上で注意すべき遺構である。

SA02 SD10が南側に開く部分で、この南岸肩部に沿って並ぶ柱穴が3個検出された。50×40cmの長方形で、深さ70cm前後である。柱間は西から330cm—450cmで、方位はE—13°—Nで調査軸線に対して9°の振れを示す。南側にはこれに対応する柱穴は検出されず、現状では一本柱穴列と判断され、さらに東側に延びる可能性がある。埋土中から土師器環などが出土しているが、国分寺に関係するものかは不明である。

SK15 S59・E31で東西の長さ290cm、南半部は調査区外にかかる状態で方形土壌が検出された。軽石混黒色土面から掘り込まれ、深さは約40cmである。底部はローム層中に造られ東側が高くなる傾向を示す。埋土中から遺物の出土はほとんどみられず、時期・性格ともに不明である。

今回の調査では、中門と回廊の遺構は確認できなかった。中門については金堂の礎石の上部の標高が129.90cm前後で、中門と推定した位置の検出面が127.60m付近であって、約230cmの比高差があることから、遺構は完全に削平されてしまったことも考えられるが、調査区北側の一段高い畑地にあった可能性も残る。また回廊についてはSD10から出土した2個の礎石から礎石建物であった可能性が強くなった。今後、さらに周辺の確認調査を進める必要がある。

(2) 遺物

瓦片および土器片が出土しているが、その大部分は3軒の竪穴住居からのものである。

SJ09は、全体に遺物の出土量は少ないが、壁の立ち上がりに接して土師器の坏の完形品があり、床面中央部からカマド手前にかけて坏・甕の破片が散在していた。またカマド焚口の袖には甕を倒立させて使用している。

Table. 5 SJ09出土遺物 (Fig. 19)

番号	種類	法 量 (mm)			胎 土		焼 成	色 調	成 形 ・ 技 法 等	図版 番号
		口 径	底 部 径	高 さ	素 地	挟 雑 物				
①	坏	134		58	やや密	雲 母	やや硬	赤褐色	内面底部にミガキ、内面胴部から外面口辺部にかけてヨコナデ、外面胴部から底部にかけてケズリ	PL 15-1
②	坏	126		51(推)	やや粗	石 英	やや軟	赤褐色	内面底部から外面口辺部にかけてヨコナデ、外面胴部から底部にかけてヘラケズリ	
③	坏	112		49	やや密		やや硬	赤褐色	内面底部にナデ、内面胴部から外面口辺部にかけてヨコナデ、外面胴部から底部にかけてケズリ	15-2
④	坏	108		37	やや粗	石 英 粒	やや軟	赤褐色	内面底部から胴部にかけてナデ、内面口辺部から外面口辺部にかけてヨコナデ、外面胴部から底部にかけてケズリ、内面胴部に蛇ノ目状に凹みあり	15-3
⑤	坏	100		45	やや粗	石 英 粒	やや軟	赤褐色 全体に黒斑	内面底部から外面口辺部にかけてヨコナデ、外面口辺部にナデ、外面胴部から底部にかけてヘラケズリ	15-4
⑥	坏	140		48(推)	やや粗	雲 母 粒 砂	やや軟	赤褐色	内面底部から外面胴部にかけてヨコナデ、外面底部にケズリ	
⑦	大型 坏か	240			密	石 英 を わ ず か	やや硬		内面胴部にナデ、内面口辺部から外面口辺部にかけてヨコナデ、外面胴部にケズリ	15-5
⑧	甕	290			粗	砂 粒	やや硬	黄褐色	輪づみ、外面胴部にケズリ	15-6

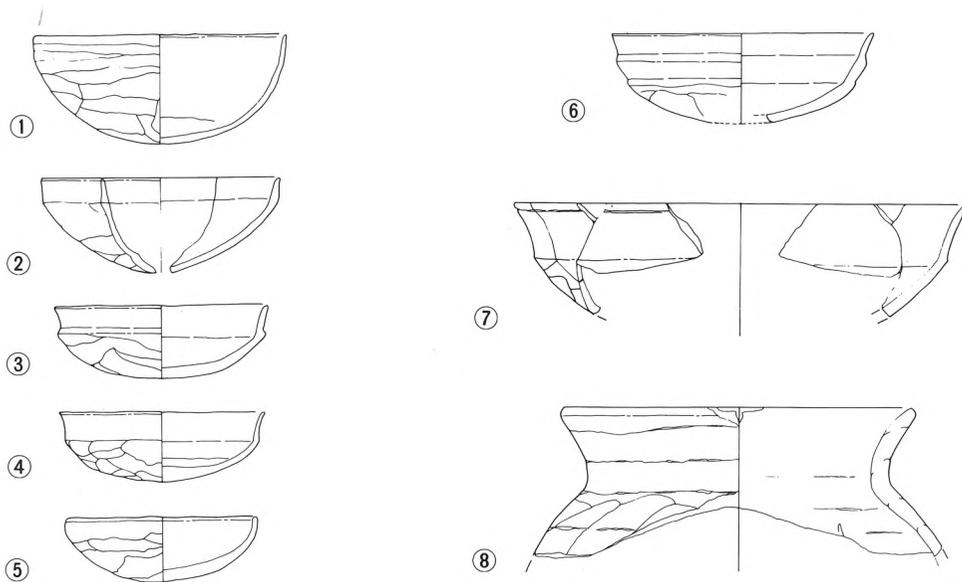


Fig. 19 SJ09出土遺物 縮尺1/4

SJ10ではカマド手前を中心とした床面上に遺物の散布がみられた。土師器の破片が多く、南東隅から出土した小型の甕1個体がほぼ完形に復元できたのみである。これ以外に長甕の底部、甕の口縁部・坏などが出土している。土器以外には、細長い自然石が数個と砂岩切石の散在しているのが認められたが、後者はカマド構築の用材であるとみられる。

Table. 6 SJ10出土遺物 (Fig. 20)

番号	種類	法 量 (mm)			胎 土		焼 成	色 調	成 形 ・ 技 法 等	図版 番号
		口 径	底部径	高 さ	素 地	挟 雑 物				
①	甕	214		270	やや粗	砂 粒	赤褐色	輪づみ、内面底部から1/3にかけてユビナデ、その上より内面胴部にかけてナデ、内面口辺部から外面口辺部にかけてヨコナデ、外面胴部から底部にかけてケズリ、内面胴部中程にヘラあとあり	PL 15-7	
②	甕	170			やや粗	砂 粒	黄褐色	内面胴部から外面口辺部にかけてヘラナデ、外面胴部にケズリ	15-8	
③	坏	118		40	やや密	石 雲 母	やや硬	赤褐色	内面底部にナデ、内面胴部から外面口辺部にかけてヨコナデ、外面胴部から底部にかけてヘラケズリ	15-9
④	坏	106			粗	石 英	やや軟	黄褐色	内面胴部にナデ、内面口辺部から外面口辺部にかけてヨコナデ、外面胴部にヘラケズリ	
⑤	坏	124			やや粗	雲母細粒	軟	赤褐色	内面胴部にナデ、内面口辺部から外面口辺部にかけてヨコナデ、外面胴部にヘラケズリ	

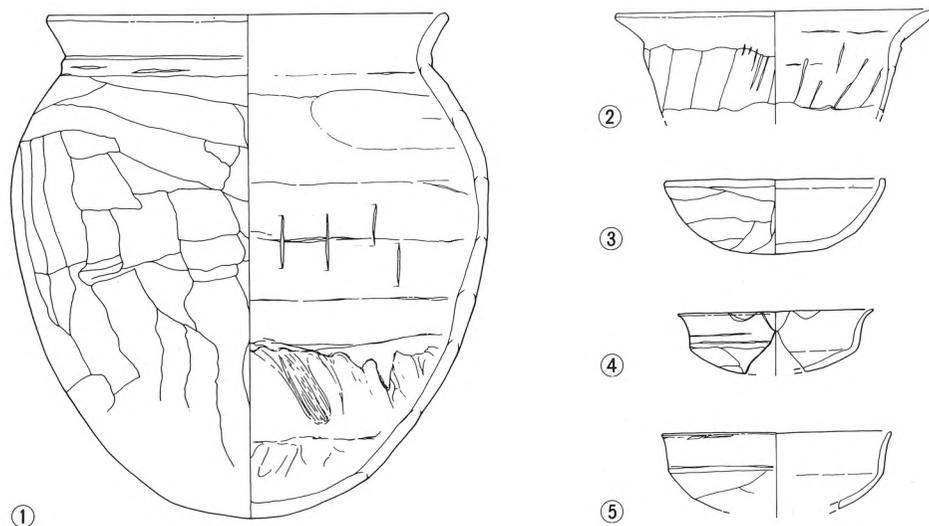


Fig. 20 SJ10出土遺物 縮尺1/4

SJ11では、南側・西側の壁の立ち上がりに接して土師器環の完形品があり、これのやや内側に長さ15cm前後の細長い自然石が4～6個を単位として3ヶ所から出土した。またこの近くの床面直上には提瓶の1/2片があった。カマドの南側には長甕1点が立つようにしてあり、その周辺には甕の破片が多数散布していた。

Table. 7 SJ 11出土遺物 (Fig. 21)

番号	種類	法 量 (mm)			胎 土		焼 成	色 調	成 形 ・ 技 法 等	図版 番号
		口 径	底 部 径	高 さ	素 地	挟 雑 物				
①	長 甕	240		380 (推)	粗	石 英	やや硬	茶褐色	輪づみ、内面胴部にヘラナデ、内面口辺部から外面口辺部にかけてヨコナデ、外面胴部に縦位ヘラケズリ	PL 16-1
②	提 瓶	96		270	やや密	石 英 黒色 鈹物	硬	灰 色	ロクロ水引き成形、内面の底に灰の付着	16-2
③	環	110			やや密		やや硬	一部還元状態の、灰色の斑を含む赤褐色	内面底部にナデ、内面胴部から外面口辺部にかけてヨコナデ、外面胴部から底部にかけてケズリ	
④	環	100		38	密	砂 粒	軟	赤褐色	内面底部にナデ、内面胴部から外面口辺部にかけてヨコナデ、外面胴部から底部にかけてヘラケズリ	
⑤	環	122		37	やや粗	石英・黒 色 鈹 物 粒 細	硬	黄褐色	内面底部にナデ、内面胴部から外面口辺部にかけてヨコナデ、外面胴部から底部にかけてケズリ	
⑥	手捏 土器	84	38	39	やや粗	気泡を含 む、石英	軟	黄褐色、断面灰色	輪づみ、内面底部から胴部にかけてナデ、内面口辺部から外面口辺部にかけてヨコナデ、外面胴部にケズリ後ナデ、外面底部ケズリ取り	16-3

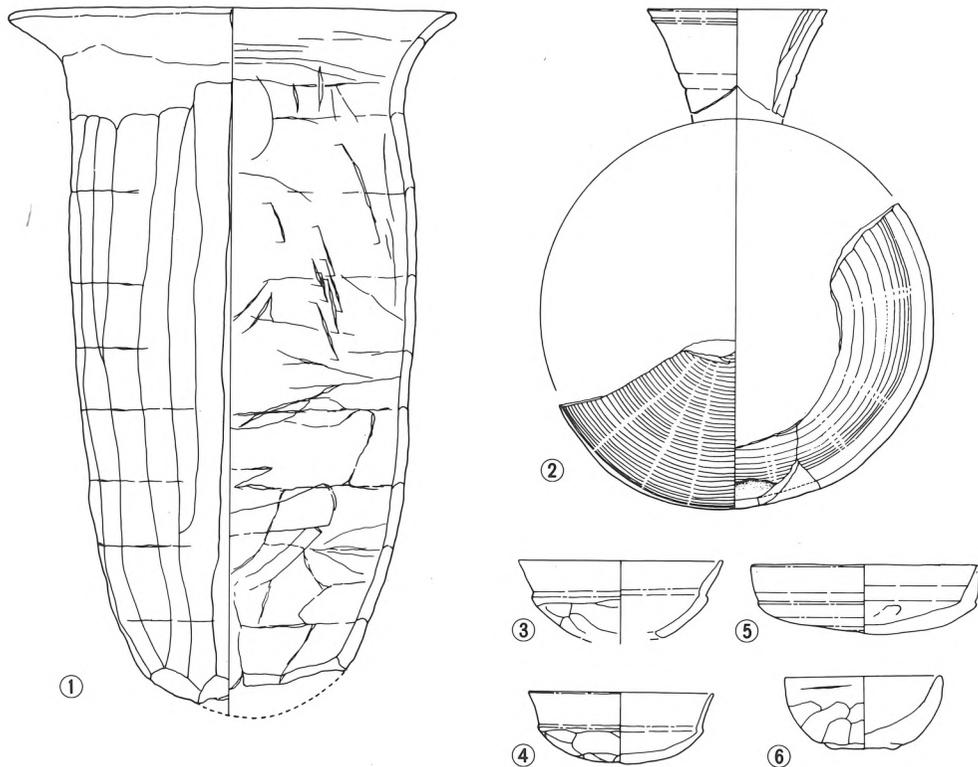


Fig21 SJ11出土遺物 縮尺1/4

SD10の埋土中には多数の瓦片とともに中世のものとみられる素焼き土器片などが包含されている。この底部に堆積する踏み固められた状態の軽石混黒褐色土・暗褐色砂質土中からは瓦片とともに土師器環などが出土している。

表土からは古墳時代後期に属する甕・坏などが出土しているが、これらは竪穴住居に伴うものが攪乱を受けたものとみられる。

Table. 8 第22次調査区出土遺物 (Fig. 22)

番号	種類	法 量 (mm)			胎 土		焼 成	色 調	成 形 ・ 技 法 等	図版番号
		口 径	底部径	高 さ	素 地	挟 雑 物				
①	長 甕	230			粗	砂 粒	やや軟	黄褐色	輪づみ、内面胴部にヘラナデ、内面口辺部から外面口辺部にかけてヨコナデ、外面胴部にヘラケズリ	PL 16-4
②	蓋	121		37	密	白色鉍物	やや硬	明灰色	ロクロ成形(右まわり)ヘラによる切り離し、内面から外面口辺部にかけてヨコナデ、外面上部はヘラケズリ	16-5
③	蓋	182			やや粗	砂 粒	やや軟	灰白色	ロクロ水引き成形、外面上部はヘラケズリ	16-6
④	蓋	165			やや粗		やや軟	灰 色	ロクロ水引き成形、外面上部はヘラケズリ	
⑤	坏	108		33(推)	やや密		やや硬	一部還元が及んで灰色の斑を含む赤褐色	内面底部にナデ、内面胴部から外面胴部にかけてヨコナデ、外面底部にケズリ	
⑥	坏	140	84	36	やや粗	白色鉍物 黒色鉍物	やや軟	暗灰色	ロクロ成形、内面底部から外面胴部途中までヨコナデ、残り外面胴部は回転ヘラケズリ、外面底部は糸切り	
⑦	坏	116	54	53	やや粗	白色鉍物 細粒	硬	灰 色	ロクロ成形、内面胴部にロクロ目内面口辺部から外面口辺部にかけてヨコナデ、外面胴部にロクロ目外面底部は糸切り	16-7

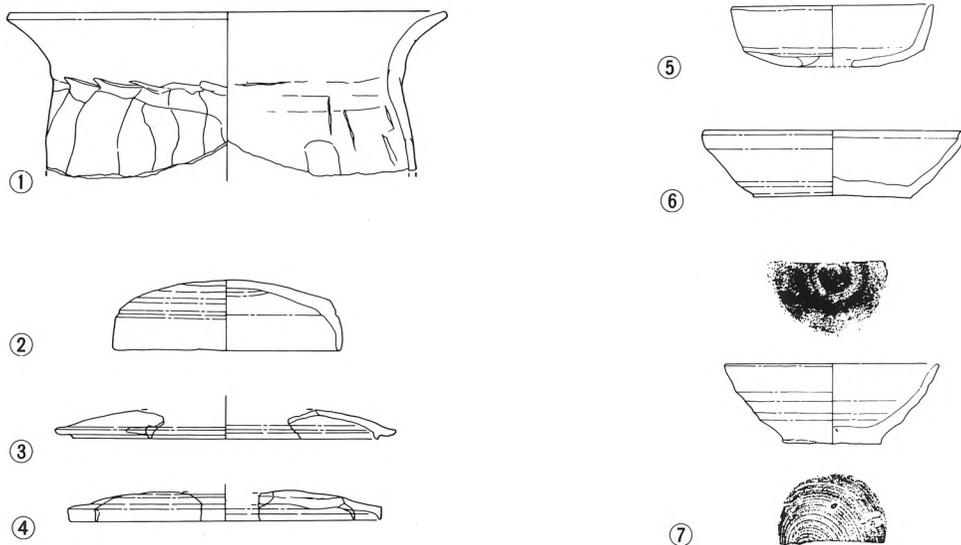


Fig. 22 第22次調査区出土遺物 縮尺1/4 ①・②・③・④・⑥・⑦表土 ⑤ S37~40・E55~65 暗褐色砂質土

7. 第23次調査

(1) 遺構

南大門および南辺築垣とそれに関係する建物の確認を目的として、これまでの調査で検出されている南辺築垣の延長線と金堂中軸線の南への延長の交点の東側を中心に調査を行なった。南辺築垣については、金堂跡の南北にある梅林とその南に続く畑地との間に東西方向の段差がみられ、金堂跡中心から約125mの位置となることから、築垣の痕跡であろうと推定されてきた。昭和49年に町道拡幅に伴う関連調査で2ヶ所にトレンチが入れられ、南辺築垣の位置と走向、規模などについて基本的な資料が得られた。史跡整備に伴う調査では、昭和55年度に寺域の確認を目的として南辺築垣が推定される位置に、東から第1・9・2・7トレンチを設定して調査を行った。これによって、東半部の第1トレンチのS96～101で築垣(SF01)とその外側にある溝(SD01)・築垣内側にある建物跡(SB02)などが確認された。また寺域中央部にある南北方向の大規模な溝状の掘り込み(SD02)の西側の第9トレンチでは、S95～101で築垣が確認されたが、攪乱がかなり目立つ状況であった。さらに西側の第2・7トレンチでは攪乱が著しく、築垣の所在を確認するには至らなかった。以上の調査の結果から、(1)南辺築垣は金堂中心から南へ124mのS99付近にある、(2)走向はE-3°50'-Nとなる、(3)地山を削り出して基部を造り、その上に黒褐色土とローム混褐色土を盛土している、(4)版築はみられず、犬走り、柱穴なども確認されない、(5)基部巾4.8m・上端巾(現況)1.5mで、寺域内地山からの比高1.38m・寺域外からの比高1.82mを測る、(6)築垣の南には巾約3mの浅い溝が設けられている、(7)周辺から多量の瓦片が出土しているが、特に寺域内に多い、(8)築垣内側(北側)ではB軽石の純層堆積が認められ、この下部に瓦の包含層がある、などの点が明らかとなった。

今回の調査は、この南辺築垣の中央部分で南大門の所在が想定される位置の周辺と、第1トレンチの東側への拡張を行った。南大門は「上野国交替実録帳」金光明寺項に「南大門壹丈長伍丈捌尺 広壹丈伍尺 高壹丈参尺」と記されており、長元3(1030)年には既に無くなっていたとされている。また築垣についても既に全壊していたことが窺える。このことから、南大門は金堂中軸線(E25.8)から東西にそれぞれ29尺(870cm)の範囲にあるが、E27から西にSD02があるため中央～西側部分はこれによって破壊されており、東端部分のみ残存していることが予測された。調査の結果、南大門の東端部分は比較的良好に遺存しており、南辺築垣も版築様の盛土を残していること、および築垣内側のSB02の全容が確認されたこと、などの成果を得た。

SB10 (南大門) S95.2～101.4の範囲でE29.6ラインを中心とする位置に、礎石3個が南北に並んで検出された。礎石は80×80cm前後の隅丸形状で、上部がやや平坦な自然石であり、北側と中央が安山岩質であるのに対し南側は砂岩質で剝離を生じている。北側礎石と南側礎石との心心距離は630cmでその中心に中央礎石がある。礎石上部の標高は北側から127.75m—127.74m—127.70mとなる。方位はN-0°-Eで、調査軸線に対し4°の振れを示す。これは塔の方位にほぼ一致する。北側礎石中心から北へ120cmの位置に、30cm大の玉石が3個東西方向に並んでいるのが検出された。この方位は礎石の方位と直交する関係にあり、基壇の北側縁石の一部とみられ

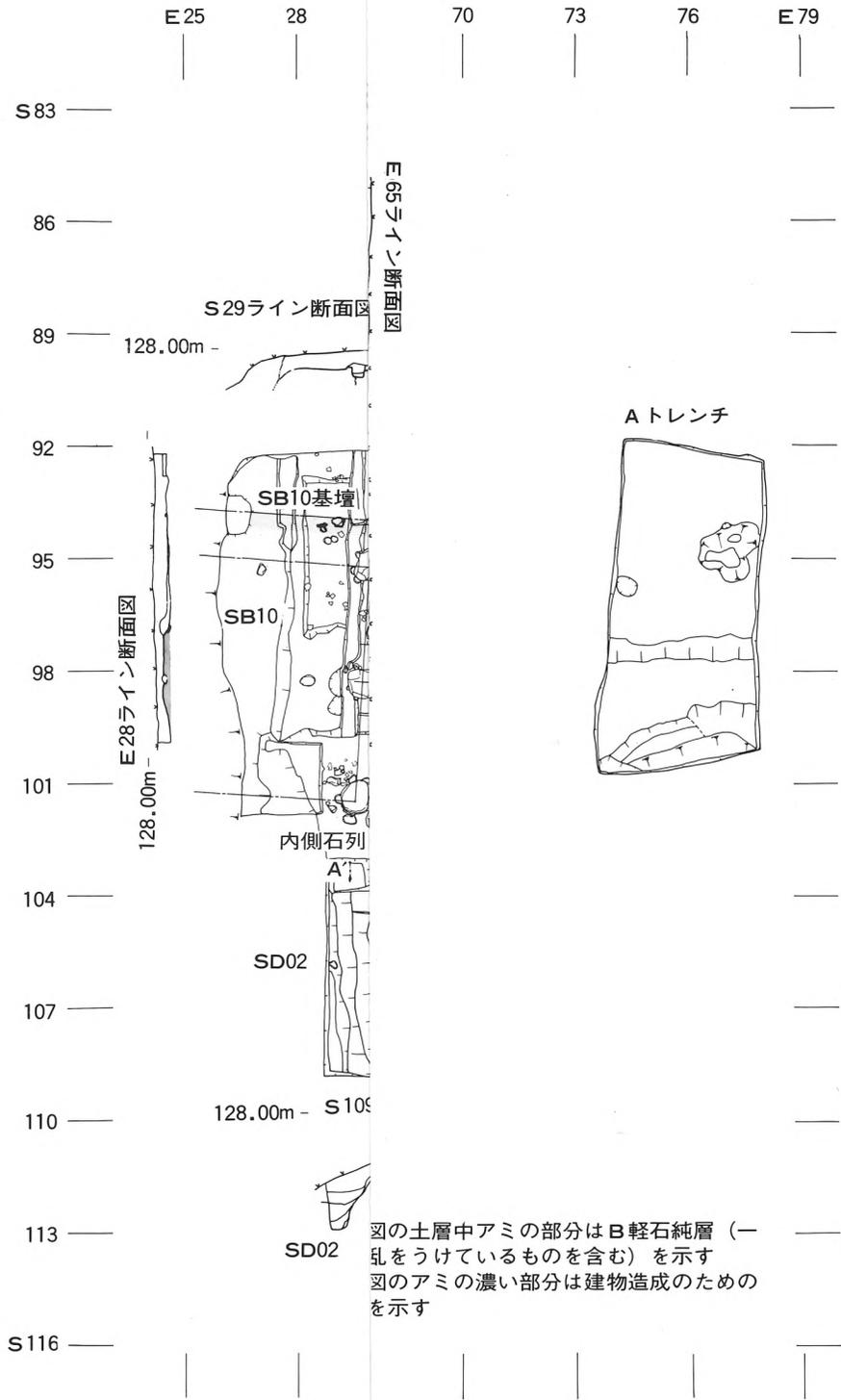
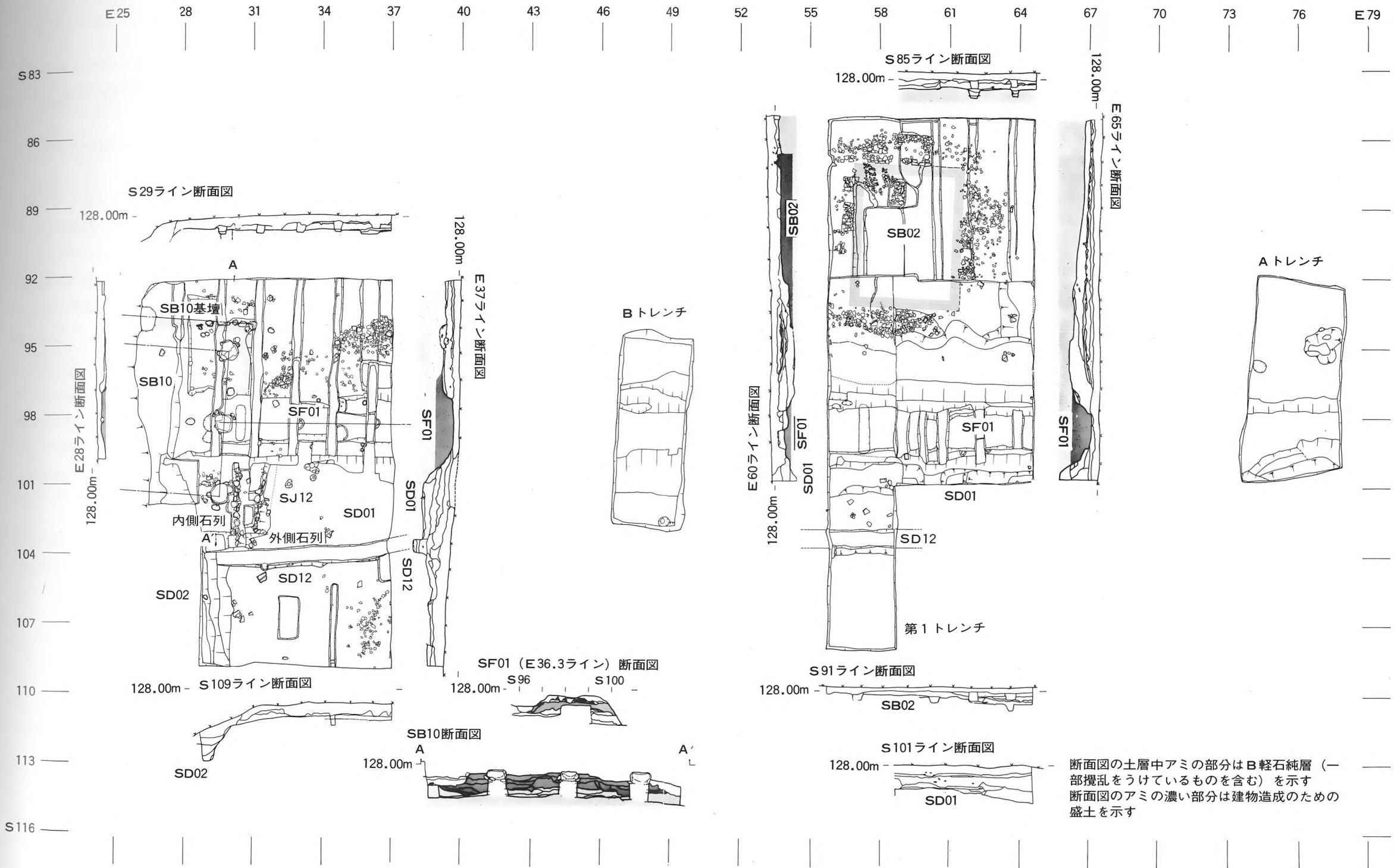


Fig. 23 第23次調査区全体



断面図の土層中アミの部分にはB軽石純層（一部攪乱をうけているものを含む）を示す
 断面図のアミの濃い部分は建物造成のための盛土を示す

Fig. 23 第23次調査区全体図 1/200

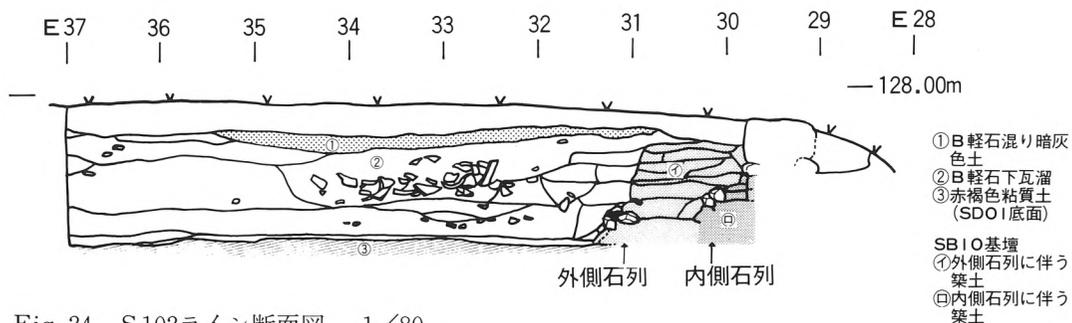


Fig. 24 S102ライン断面図 1/80

る。この東端の石は他の2個が楕円形状なのに対して、一回り大きく北東部に角をもつような形状をもっている。この東側は耕作溝があるため東側縁石は残存していないが、礎石中心から115cmの距離にあることからこれが基壇東縁の位置となるものと推定される。この上部は標高127.69mであり、礎石上面の標高との差が6cm程度であることから、縁石は原状でも1段であったと判断される。また縁石北側の堆積状況から、基壇は寺域内の生活面より45cm程度の高さをもっていたとみられる。検出された礎石は東側柱のものであり、さらに西側の礎石の検出を行なったが、西へ210cmまでの範囲では礎石および根石の痕跡は確認されなかった。このため桁行の全長と柱間についての所見を得ることはできなかった。基壇は築垣南側溝(SD01)に張り出す形で南へ造られており、南側縁下部は南側礎石中心から240cmの位置にあるとみられる。この張り出し部分の東側縁の基部には径30cm前後の扁平な玉石が一行あり、この上下には大型の瓦片が差し込まれるようにしてあった。(Fig.

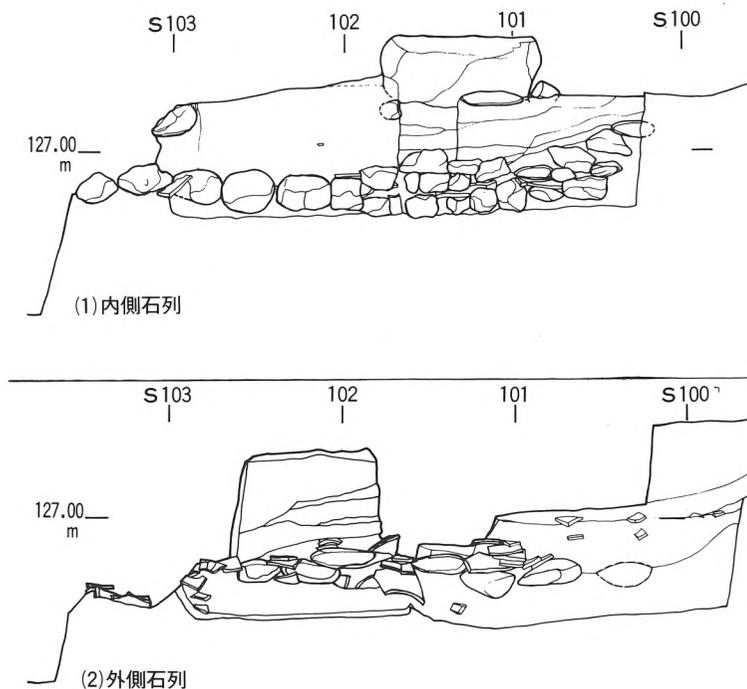
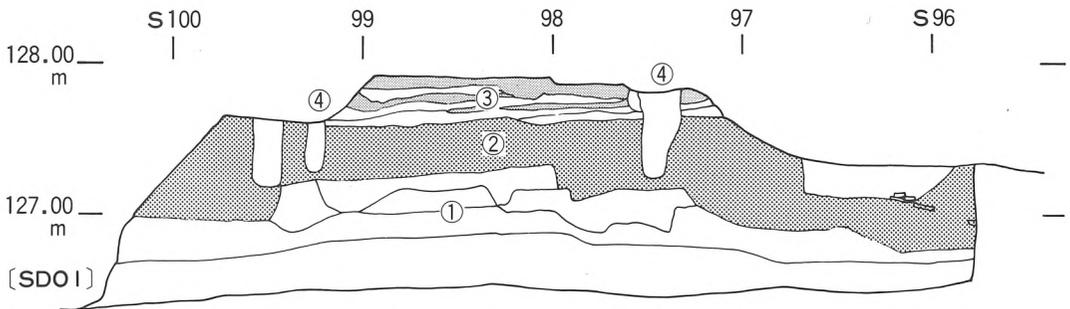


Fig. 25 SB10基壇東側縁辺石列 1/40

るようにしてあった。(Fig. 25-(1))。この石の下部の標高は126.60m前後である。この方位はN-6°-Eで築垣との取りつき部から先に向かってやや狭くなる形状を示している。この上部はロームと軽石を混ぜる黒褐色粘質土が水平な層をなして固く積み上げられており化粧の状況は認められない。この立ち上がりは垂直に対して約15°の傾斜で、現状で80cm、SD01の底部からでは現状で105cmの高さをもっている (Fig. 24)。このことから基壇はSD01から

120cm前後の高さに造られていたものと推定される。以上のことから南大門は桁行は不明であるが、梁間 630 cm (21尺)・基壇の奥行 (下部) 990 cm (33尺)・基壇の出は北側で 120 cm (4尺)・東側で 110~120 cm (約 4尺)・南側 (下部) で 240 cm (8尺) であることがわかった。また方位は金堂および南辺築垣東半部と異なり、塔に近いことが注目されるが、これに関しては基壇石列の内側にもう一列の玉石列が検出されたことが問題となる。これは外側石列から築垣との取りつき部で 100 cm、先端部で 80 cm 基壇の内側に入った位置にあり、全長は 330 cm で拳大~人頭大の玉石を 1~3 段に積み、この間隙には大型の瓦片がくい込ませてある。下部の標高は 126.65 cm 付近であり、築垣に向かって高くなっていく (Fig. 25-2(2))。方位は N-3°-W で、調査軸線に対して 1° の振れを示す。この内側石列は礎石中心から外側へ 75 cm 前後出ているのみであることから、現存の礎石に伴う基壇の縁石であるとは考えにくい。また基壇の築土は、この石列の内側を造った後に外側の盛土を行った状況がある。このことから内側石列は (1) 現状の基壇を造成する際の工法上の構造物、(2) 現状の基壇に先行して造られていた基壇の縁石、の 2 つの可能性が想定される。現在、これを判断するための確実な資料を得ていないため即断はできないが、検出された南大門の方位が南辺築垣の方位とずれを示していること、外側石列は現状の南大門に伴うものであるのに対し内側石列は南辺築垣東半部の方位にほぼ直交すること、出土した瓦に創建時期のものとともに新しい型式のものが多量にあること、などの点から、(2) の可能性が強いと判断される。

SFO1 南大門基壇の東側中央部にとりつく形状で、東に延びる築垣が検出された。S98.4 を中心とし、現況で築土の上部巾 180 cm ・築土の基部巾 200 cm ・地山を削り出して造った築垣基部巾 420 cm を測る。築垣基部は軽石混黒褐色粘質土を台形状に削り、この上に粘性の強い軽石混黒色土を厚く盛って造られている。この上部に外側は約 60 cm ・内側は約 40 cm の巾で犬走り状の平坦部を設け、この間に黒色粘質土とローム混暗褐色粘質土を 1 単位 3~5 cm の厚さで版築様に積んだ本体部が造られている。本体基部の両側には僅かであるが窪みがある (Fig. 26)。E35.7 の位置では径 25 cm ・深さ 45 cm の円形柱穴が 180 cm の間隔で 1 対検出され、寄柱ではないかとみられるがこれ以外には確認をすることができなかった。また S98.3 ・ E32.8、S98.3 ・ E36.2 の 2 個所で築垣本体を掘り込む径 40~50 cm ・現況で深さ 25 cm の円形柱穴が検出された。柱間は 330 cm を測



①地山 ②築垣基部盛土 ③築垣築土 ④寄せ柱柱穴

Fig. 26 SF01 E35.7ライン断面図 1/40

り、西側への延長線は330cmで南大門の中央礎石の中心に至る。この柱穴は第1トレンチおよび東側への拡張区などでは検出されないため、築垣に伴う構造物か、あるいは南大門の構造物であるのかについては、今後の検討が必要である。

SD01 南辺築垣の南に接してある溝で、南岸は小溝によって切られているため明瞭ではないがこの小溝の南岸までは、E37ラインで巾315cmを測る。またこの西側では南大門基壇の張り出しに伴って次第に南に広がる形状を示し、E32ラインでは巾415cmとなる。底部は標高126.40mでほぼ平坦である。底面から約90cm上層にB軽石を主体とする暗灰色土層があり、これ以下の堆積土中にはB軽石の混入はみられない。溝の南岸近くには上部巾75cm・底部巾50cm・深さ60cmで「U」型に掘られた小溝(SD12)がある。この掘り込み面はSD01底部に堆積した軽石混黒色粘質土上面からで、埋土の下層部にはB軽石の2次堆積がみられ、上層部には瓦小片が包含されている。この溝は南大門基壇の南側縁に接するように南に傾斜をしており、SD01の造られた後にその南岸に沿って掘られたもので、国分寺に関係する遺構とみられる。

SJ12 築垣の南斜面下部に焼土塊と帯状に焼けた部分のあるのが検出された。これの西側を試掘したところ赤褐色粘質土の地山の上から土師器甕が倒立した状態で出土した。これらのことからS100・E32付近に竪穴住居址のあることが確認されたが、北半部は南大門および築垣下に入っており、南半部はSD01のために破壊されており、その規模などについては不明である。出土遺物から古墳時代後期のものとみられる。

SB02 第1トレンチの東側に拡張した調査区で、瓦積み基壇をもつとみられた建物跡の全容を確認した。S87ラインのE59~61で南側が北側に較べて約15cm高い段差があり、この斜面に平瓦・丸瓦が東西方向に列をなして並べられているのが確認された。この北側には多量の瓦片が散布している。またE62ラインのS87~93.5でも西側が20cm高くなる段差のあるのが認められた。この東側には多量の瓦片が散布している。この南北約680cm×東西約560cmの長方形の内部は固くしまった軽石混暗褐色粘質土で一段高く造られており、この縁辺部に大型の瓦を並べている状況が明らかとなった。この瓦列は基壇状の高まりの周囲を化粧するためのものかとみられるが、残存状況があまり良好でないため細部については不明である。また基壇の上部はかなり削平をうけているものとみられ、この周囲にはB軽石の純層堆積が良好に残るが、基壇上ではこの層は残存していない。礎石、根石、柱穴は確認できず、建物の規模および構造については不明である。方位はN-4°-Eで南大門礎石列の方位に近い。また、南辺築垣のこの遺構の前にあたる部分では、基部が踏み固められたようにしまった軽石混黒褐色粘質土で、SD01でもこの部分が同様な土質で山盛状に高くなっている状況がみられた。SB02に関係する構造の可能性が考えられるが、現状ではこの部分にも築垣本体の築土があって開口部とはみられない。今後の検討が必要である。

今回の調査においては、南大門について、(1)奥行について「上野国交替実録帳」では15尺とするのに対して、現状では21尺あること、(2)方位が南辺築垣東半部に対して4°の振れをもつこと、(3)造り替えの行われた可能性が強いこと、などの点を明らかにすることができた。

(2) 遺物

南大門周辺のB軽石層下の瓦溜りからは、多量の軒丸瓦・軒平瓦および丸瓦・平瓦に混じって、
 環・皿などの土器類が出土している。また基壇周辺からは化粧材とみられる角閃石安山岩切石が
 出土している。

Table. 9 第23次調査区出土遺物 (Fig. 27)

番号	種類	法 量 (mm)			胎 土		焼 成	色 調	成 形 ・ 技 法 等	図版 番号
		口 径	底部径	高 さ	素 地	挟 雑 物				
①	皿	140	94	25	粗	砂 粒	軟	黄灰色	内面底部から外面胴部にかけてヨコナデ、外面底部にヘラケズリ、全体の1/3程度が残る	PL 17-1
②	高台環	118	71	47	粗	砂 粒	軟	黄灰色	内面底部から外面胴部にかけてヨコナデ、外面底部は糸切り未調整つけ高台	
③	高脚 高台環		84		粗	黒雲母	やや軟	外面黄褐色 断面灰白色	内面ヨコナデ、外面胴部から高台にかけてヨコナデ、外面底部は糸切り未調整	
④	環	96	44	32	粗		軟	赤褐色	輪づみ、内面底部から外面胴部にかけてヨコナデ、外面底部は右まわりの糸切り、内面口辺付近に炭素の付着あり	17-2
⑤	蓋	101		25	密		硬	青灰色	巻きあげ水引き成形、口辺部ヨコナデ、外面上部にヘラケズリ	17-3
⑥	高台環	106	62	47	粗	砂 粒	軟	赤褐色	内面底部から外面の高台にかけてヨコナデ、外面底部は糸切りらしい、つけ高台	17-4
⑦	高台皿	148	88	26	粗	白色鉱物	やや硬	内面灰白色 外面暗灰色	ロクロ成形、全体にヨコナデつけ高台	
⑧	高台皿	134	84	30	粗	砂 粒	軟	黄灰色	内面胴部から外面胴部にかけてヨコナデ、外面底部は糸切り、つけ高台	
⑨	環	116	66	38	粗	石雲 英母	軟	全体に炭素が及び、 黒色を呈する 断面灰色	内面胴部から外面胴部にかけてヨコナデ、外面底部は糸切り未調整	
⑩	環	110	60	37	粗	石雲 英母	軟	黄褐色	内面胴部から外面胴部にかけてヨコナデ、外面底部は糸切り未調整	
⑪	高台環	132	38		粗	石 英 粒	軟	灰白色	内面胴部から外面胴部にかけてヨコナデ、外面底部は糸切り後ナデつけ高台	

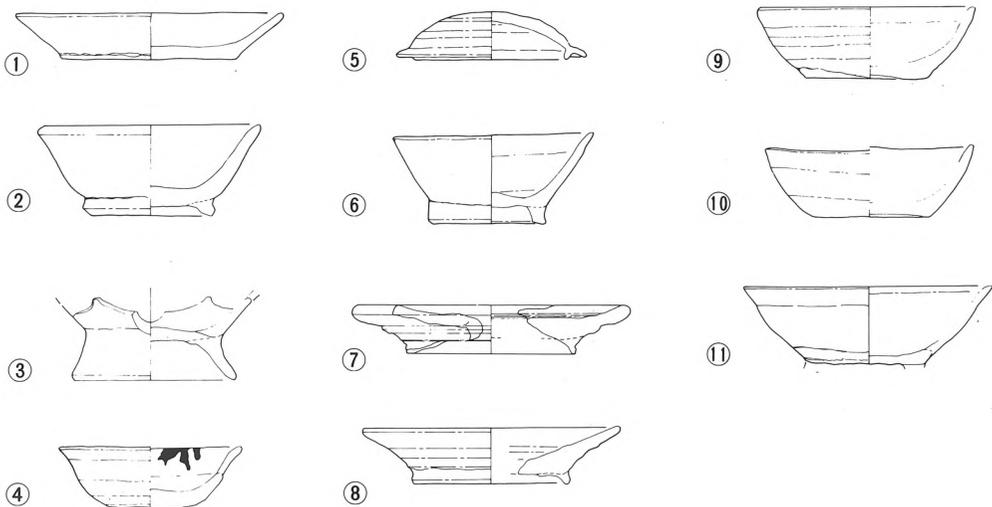


Fig. 27 第23次調査区出土遺物 縮尺1/4

①・② 表土 ③・⑥・⑦・⑧・⑨・⑩・⑪ B軽石層下瓦溜
 ④ S92~96・E32~40 暗褐色粘質土
 ⑤ S94~97・E55~59 軽石混暗褐色土

軒丸瓦には創建期の単弁五葉のもの (Fig. 28-①~③) から、ヘラ描きの単純化された文様のもの (Fig. 29-⑤) まで多種類が出土している。その中でも重弁四葉のもの (Fig. 29-①) の出土点数が多いのが目立ち、南大門の改築に際してはこれが中心に使用された可能性を示している。

Table. 10 第23次調査区南大門周辺B軽石層下瓦溜出土軒丸瓦 (Fig. 28)

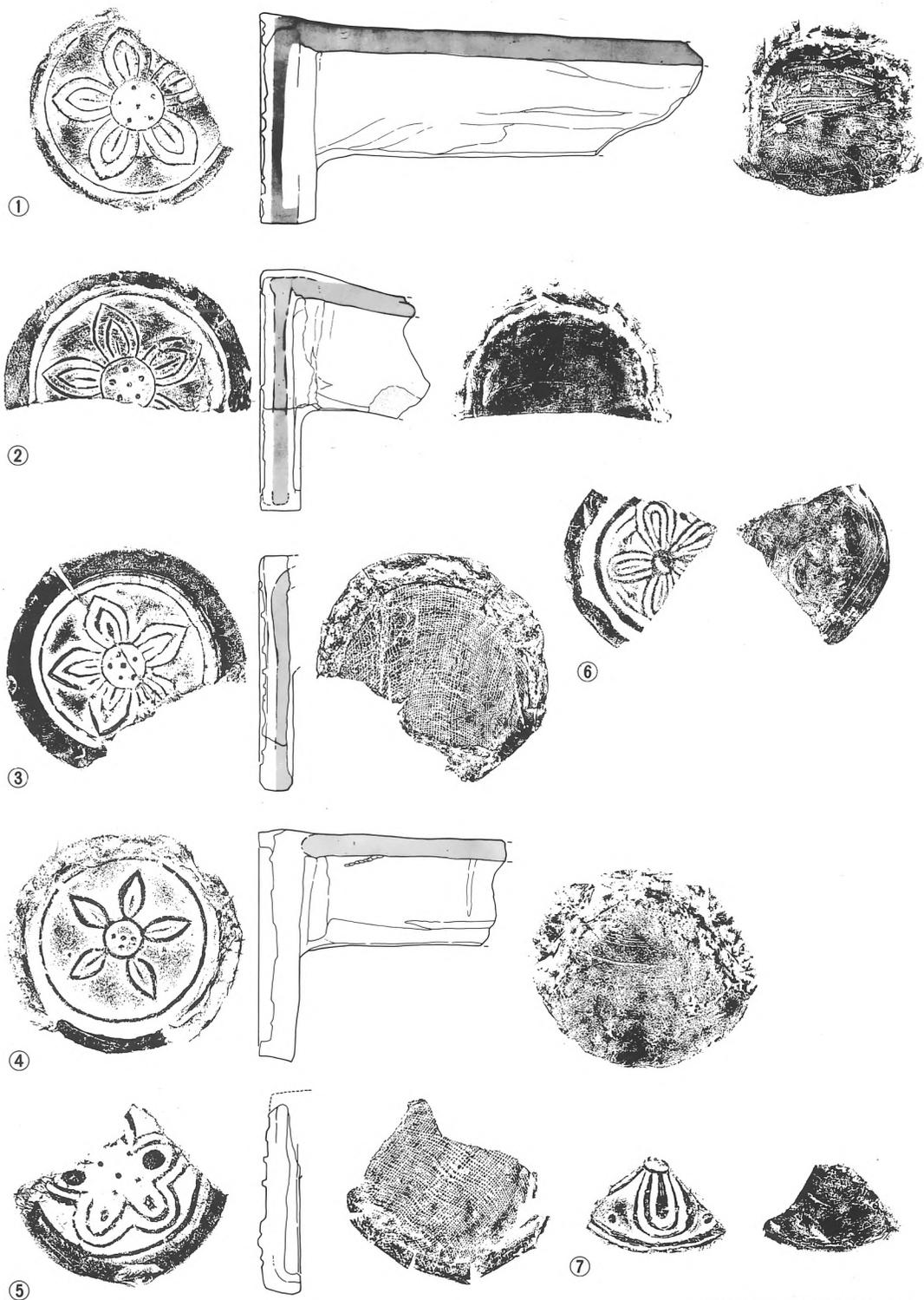
番号	胎土	焼成	色調	成形・調整等	図版番号
①	素地はやや粗く、石英・雲母をやや多くふくむ	硬質	外面黄灰色、断面赤褐色	丸瓦部凸面瓦当部より端部方向へのヘラケズリ、凹面布目痕をユビナデ、布の合わせ目痕あり、瓦当部の接合は、1本造り後厚く胎土を埋め込みその後ユビナデ、瓦当部下半ヘラケズリ	P L 17-5
②	素地はやや粗く、石英をふくむ	硬質	外面灰色、断面赤褐色	丸瓦部外面ナデ、内面布目痕、瓦当部を接着後裏面ナデ、瓦当部の残存は全体の50%程度、裏面にしっくい残存している、一本造りの可能性あり	
③	素地はやや細く、白色鉱物を多くふくむ	焼き締め	外面・断面とも黒灰色	丸瓦部欠失、瓦当部裏面布目、1本造りの可能性がある	
④	素地は粗く、石英を多くふくむ	硬質	外面・断面とも灰白色	丸瓦部凸面瓦当部方向へのケズリ、凹面布目痕合わせ目・粘土板剥ぎ取り痕がある、瓦当部表面に范離れをよくする砂を付着、裏面は接合後ナデその後横位のヘラケズリ	
⑤	素地は粗く、石英の大粒を多くふくむ	焼き締め	外面・断面とも灰色	丸瓦部、瓦当部1/3欠失、瓦当部裏面に布目痕	17-7
⑥	素地はやや粗く、石英をふくむ	やや硬質	外面・断面とも灰白色	丸瓦部、瓦当部1/2を欠失、瓦当部裏面はユビナデ後下半のみヘラケズリ、粘土の重ね合せは認められず薄い	
⑦	素地は粗く、石英・雲母細粒を多くふくむ	硬質	外面・断面とも灰白色	丸瓦部、瓦当部大半を欠失、瓦当部に胎土を充てん後瓦当裏面を接着するか	

Table. 11 第22・23次調査区出土軒丸瓦 (Fig. 29)

番号	胎土	焼成	色調	成形・調整等	図版番号
①	素地は粗く、石英白色鉱物の大粒を多くふくむ	焼き締め	外面・断面とも黒灰色	丸瓦部凸面ナデ、凹面布目痕・粘土板剥ぎ取り痕あり、瓦当部表面フレ・磨耗の激しい范型、裏面布目痕、丸瓦部凸面瓦当部寄りに「半」の刻書がある	P L 17-7
②	素地はやや細かく、白色鉱物雲母をふくむ	焼き締め	外面・断面とも灰色	丸瓦部凸面ケズリ、凹面布目痕をナデ消す、瓦当部は内区を円盤状につくり、それに外区を付加した後出来た溝に丸瓦部をはめ込み胎土を充てんする、瓦裏面上半はユビナデ、下半はケズリ	
③	素地はやや粗く、黒色鉱物を多く混じえる	硬質	外面・断面とも灰白色	丸瓦部凸面ケズリ、凹面布目痕、瓦当部は表面を笥上に置き丸瓦部を折りまげて接着した形跡がある	17-8
④	素地は粗く、石英・雲母を多くふくむ	やや硬質	外面黒色、断面灰褐色	丸瓦部凸面全面ナデ、凹面及び瓦当部裏面に布目痕を残す、丸瓦と瓦当部との接続は上面をややはめ込み気味にするも、胎土で充てんする量は少ない	17-9
⑤	素地はやや粗く、黒色鉱物を多くふくむ	焼き締め	外面灰色、断面灰褐色	丸瓦部欠失、瓦当部に丸瓦を接着して胎土を充てん、瓦当裏面ナデ	17-10
⑥	素地は粗く、石英・白色鉱物を多くふくむ	硬質	外面・断面とも灰色	瓦当部1/3程度、裏面に布目、范に数回にわたって粘土を充てんした形跡あり	
⑦	素地は粗く、石英・黒色鉱物を多くふくむ	やや硬質	外面黄灰色、断面黒灰色	丸瓦部、瓦当部1/3欠失、瓦当部表面砂多く、裏面布目痕あり、布目を二次的に擦り消した跡がある	
⑧	素地はやや粗く、石英をふくむ	やや硬質	外面・断面とも灰白色	丸瓦部、瓦当部接合部分欠失、瓦当部表面砂の付着あり、内区をつくった後外区を付加	

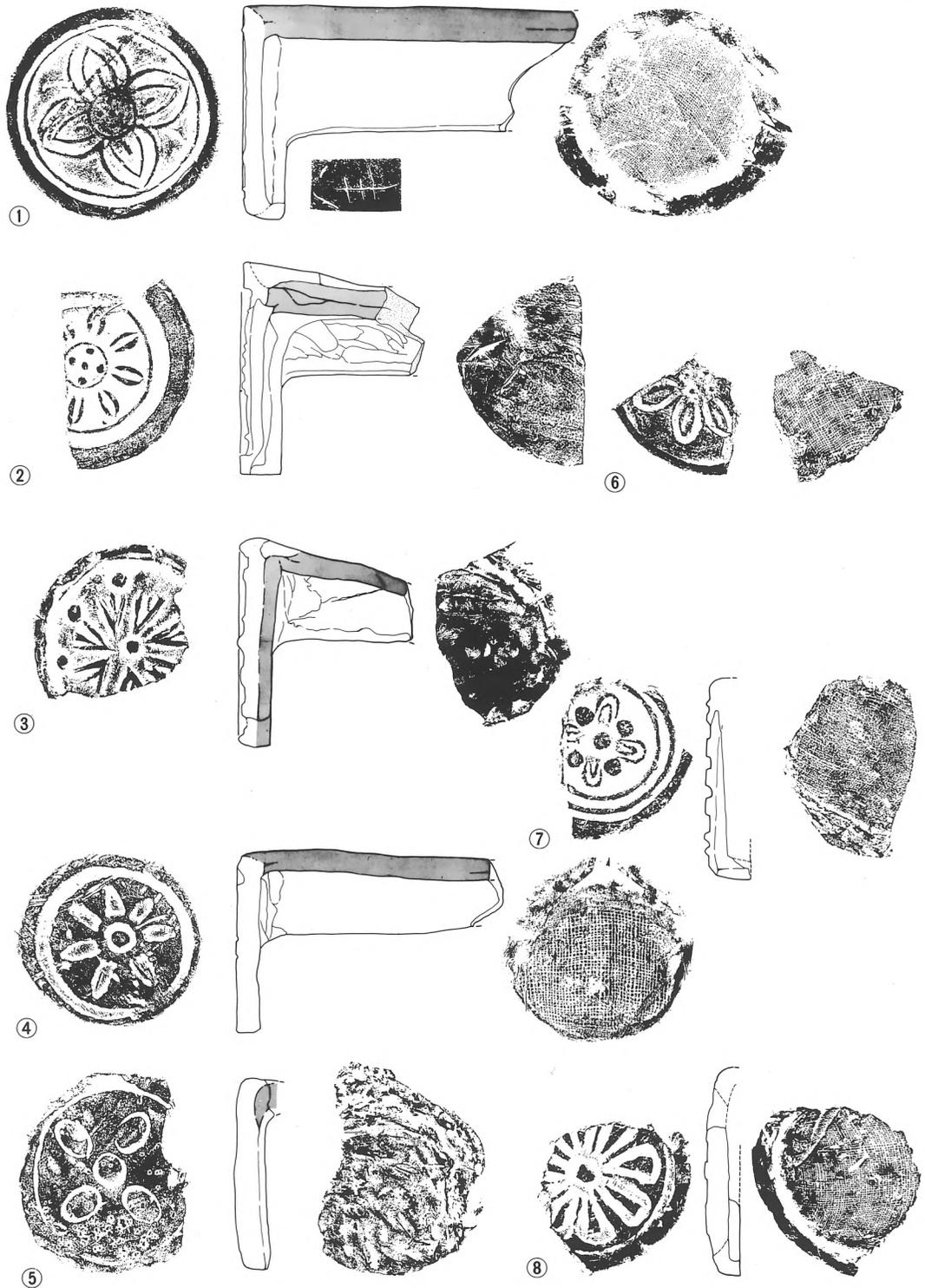
Table. 12 第23次調査区南大門周辺出土軒丸瓦 (Fig. 30)

番号	胎土	焼成	色調	成形・調整等	図版番号
①	素地はやや粗く、石英の大粒を多くふくむ	硬質	外面・断面とも灰白色	丸瓦部凸面端部部分方向へのヘラケズリ後ナデ、凹面も同じ、粘土板の接合あり頸部は特別につくり出しておらず、平瓦の端部をふくらませ、型挽き三重弧文	P L 17-15
②	素地はやや粗く、白色鉱物、雲母をふくむ	硬質	外面・断面とも黒灰色 断面には一部灰色のしまが入る	平瓦部凸面端部部分方向へのヘラケズリ、凹面布目痕が残る、粘土板剥ぎ取り痕模骨痕あり、側面の面取り3、型挽き三重弧文、頸は特別につくり出しておらず、平瓦の端部をふくらませているだけ	
③	素地は粗く、石英・雲母・白色鉱物・黒色鉱物などをふくむ	硬質	外面・断面とも青灰色	平瓦部凸面全面叩後ナデ、一部に赤色塗料の付着が認められる、凹面全面に布目痕が残るの一部ケズリ、粘土板剥ぎ取り痕、粘土板の合せ目あり、側面の面取り2	17-11
④	素地はやや粗く、白色鉱物を多くふくむ	硬質	外面・断面とも概ね青灰色	平瓦部凸面ケズリ後ナデ、凹面布目痕・粘土板剥ぎ取り痕あり、側面の面取り2、瓦当部は先ず范に粘土を入れ、平瓦と接合後曲線頸をつくる	
⑤	素地はやや粗く、黒色鉱物を多くふくむ	硬質	外面青灰色、断面灰色	平瓦部凸面大分のケズリ、凹面布目痕をケズリで消す、粘土板剥ぎ取り痕あり側面の面取り1、凸部に丸くケズリ、范は平瓦部をおき、一気に曲線頸状につくる	17-12
⑥	素地はやや粗く、白色鉱物を多くふくむ	硬質	外面青灰色、断面灰色と褐色のしまが入る	平瓦部凸面ケズリ後ナデ、凹面布目痕・粘土板剥ぎ取り痕・模骨痕あり、側面の面取り2、頸部は平瓦端部をふくらませ、范の部分をおおう分を付加し、さらに補強部分を足して曲線頸をつくる	
⑦	素地はやや粗く、白色鉱物をふくむ	硬質	外面・断面とも黄灰色	平瓦部凸面ケズリ後ナデ、凹面布目痕・粘土板剥ぎ取り痕あり、側面の面取り2、頸部は平瓦端部に曲線頸状の部分付加し、補強用粘土で充てん、凸面に赤色塗料の付着がある	17-13
⑧	素地は粗く、白色鉱物をふくむ	硬質	外面・断面とも灰色	平瓦部凸面ケズリ後ナデ、凹面布目痕・粘土板の合せ目あり、側面の面取り1頸部は平瓦と合せて一気につくる	17-14
⑨	素地は粗く、石英・黒色鉱物を多くふくむ	焼き締め	外面・断面とも黒灰色	平瓦部凸面ケズリ後ナデ、凹面布目痕・粘土板の剥ぎ取り痕あり、頸部は平瓦と合わせて范にのせている	
⑩	素地はやや粗く、石英・雲母を多くふくむ	焼き締め	外面・断面とも青灰色	平瓦部凸面はヨコナデ、凹面布目痕をナデ消す、側面の面取り2、頸部は先ず2本の帯を范に貼りつけ後平瓦部を接合して胎土で充てんしている	
⑪	素地はやや粗く、石英をわずかにふくむ	焼き締め	外面・断面とも青灰色	頸部のみ、平瓦部へ頸部をはめ込み段頸となる、接合をよくするため、工具などでつけている	
⑫	素地は粗く、白色鉱物をわずかにふくむ	硬質	外面・断面とも黄灰色	頸部のみ、平瓦と合せた後范にのせ曲線頸をつくる	17-16
⑬	素地は粗く、白色鉱物を多くふくむ	硬質	外面・断面とも灰色に白い斑状の部分が入る	頸部のみ、段頸で、粘土の帯を3回程度重ねてつくっている、瓦当裏面となるところに赤色塗料の付着がある	



アミの部分は丸瓦部分を示す

Fig. 28 第23次調査区南大門周辺B軽石層下瓦溜出土軒丸瓦 縮尺 1/5



アミの部分は丸瓦部分を示す

Fig. 29 第22・23次調査区出土軒丸瓦 縮尺 1/5 ①~⑥・⑧第23次調査区南大門周辺B軽石層下瓦溜
⑦第22次調査区表土

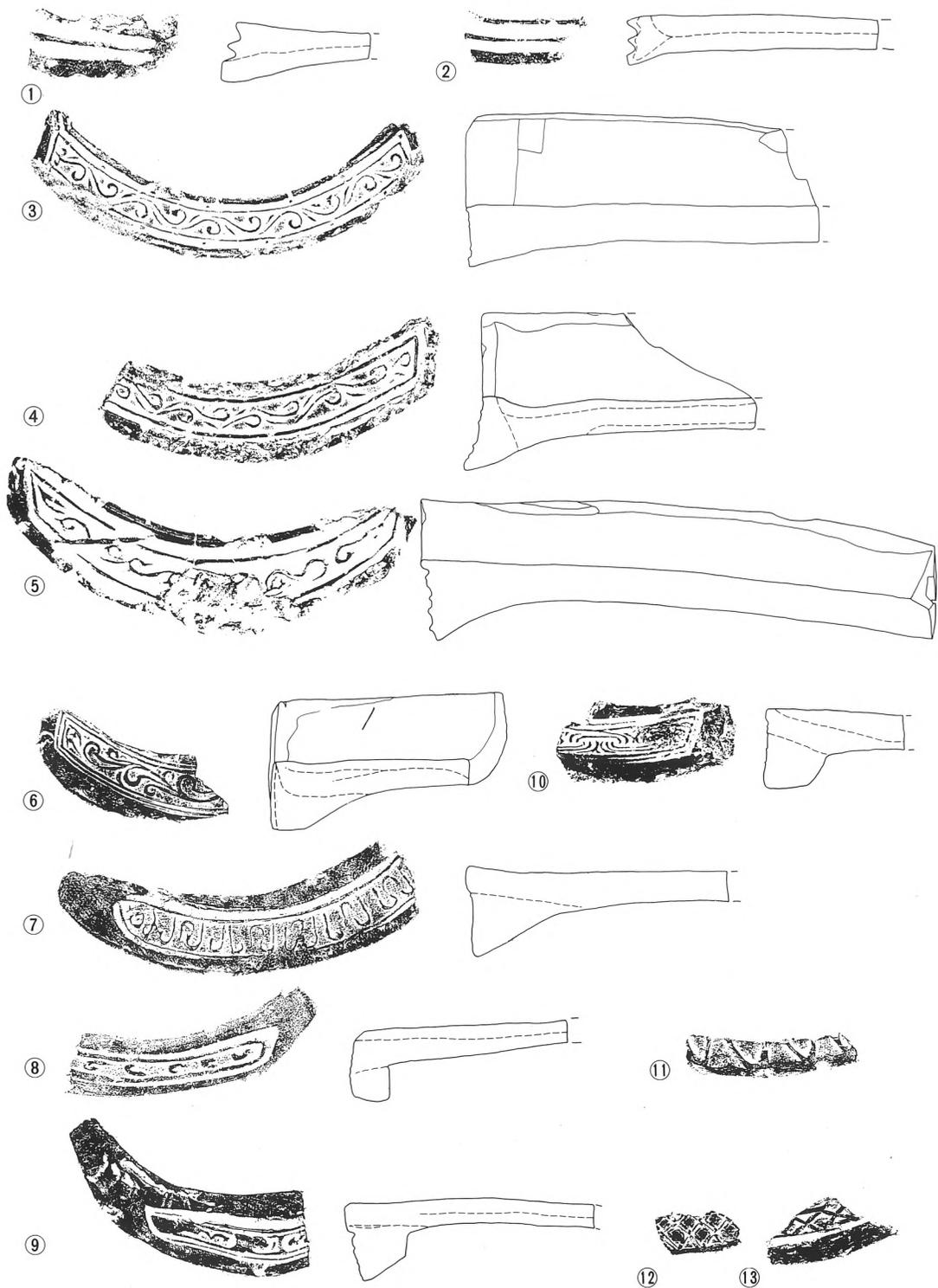


Fig. 30 第23次調査区南大門周辺出土軒丸瓦 縮尺 1/5

①~⑤・⑦~⑬B 軽石層下瓦溜
⑥南大門基壇上面

(3) 文字瓦

今回の調査で出土した遺物の中でも、南大門および南辺築垣に使用されたとみられる瓦の中に文字を記すものが多数あったことが注目された。これらは(1)墨書するもの、(2)押印をするもの、(3)ヘラ描きするもの、に区別される。

墨書をもつ瓦はこれまでに南大門周辺から3点の出土が確認されている(Fig.18-1.2.3)。この中の2点は「凡国足」・「里麻呂」と人名を記しており、1点は「^(馬カ)□野」と記されている。いずれも桶巻造りの平瓦の凸面に書かれている点が共通しており、人名はやや小ぶりな書き方をしている。これらは国分寺の瓦の中でも比較的古いものに書かれている。

押印には「山田」(Fig. 32-③)・「勢」(Fig. 32-①)・「勢□」(Fig. 32-②)の郡名とみられるものがある。この他に「^(廣カ)雷」(Fig. 32-⑥)・「^(廣カ)菌□」(Fig. 32-④)・「^(廣カ)□山」(Fig. 32-⑤)などがある。特に「^(廣カ)□山」の出土の多いことが目立つが、この字義は不明である。

ヘラ描きは多数出土しており、まだ整理が終了していないが100点以上あるとみられる。この中でも無段式丸瓦の側縁部に狭端を上にして「山字物^(部)マ子成」と大書されたもの(Fig. 31-①)のあることに注目される。これは「物マ子成」の姓名の上に「山字」を加えたもので、この字義について(1)人名の一部であるか、(2)地名であるか、の問題が生じた。これを検討するについて、第9トレンチの南辺築垣外側から出土した(イ)「山字子文麻呂」(Fig. 31-②)、第1トレンチの南辺築垣外側溝から出土した(ロ)「山物マ乙□」(Fig. 31-③)が参考となる。(イ)とは「山字」の部分、(ロ)とは「物マ」の部分共通するが、さらに(ロ)の最初の字である「山」は、これら全部の第1字である点で共通している。そこで「山字」について他の史料で検討すると、高山寺本『和名類聚抄』郷名部の多胡郡に「山字也末奈」の郷名のあることが知られる。この「山字」は二十卷本『和名類聚抄』では「山宗」と書かれており、『続日本紀』和銅4(711)年3月辛亥条の多胡郡建置の記事では「山等」、天平19(747)年2月の『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』に「山部郷」、正倉院庸布墨書に「山部」または「山那」とあり、一定していない。従って「山字」をもって直ちに郷名とするには問題が残るが、「字」には「あざな」の訓と「人名、な」の字義があること、また現在まで「山字物部」・「山物部」および「山字」の姓の例の知られないことなどを考慮し、これを『和名類聚抄』に従って郷名の「也末奈」と推定しておきたい。こうしてみると「山字物マ子成」は「郷名+姓+名」であり、(イ)の「山字子文麻呂」は「郷名+名」、(ロ)「山物マ乙□」は「郷名の省略形+姓+名」であると解釈でき、郷名を1字に省略する例のあったことが考えられる。そしてこれに該当するものとして「石」(Fig. 32-⑳)＝碓氷郡石井郷または新田郡石西郷、「長」(Fig. 32-㉕)＝片岡郡長野郷または群馬郡長野郷、「真」(Fig. 32-㉖)＝勢多郡真壁郷または山田郡真張郷、「高」(Fig. 32-㉗)＝緑野郡高足郷などがあるが、そのなかでも「八田」(Fig. 32-㉘)＝八田・「辛□」(Fig. 31-④)＝辛科・「織」(Fig. 31-⑤)＝織裳・「武」(Fig. 32-㉚)＝武美・「山」(Fig. 32-㉑)＝山字・「大」(Fig. 32-㉒)＝大家など、多胡郡管下の郷名に該当するものが多いことに特色がある。そして先に掲げた(ロ)と同文のものが吉井町多比良の滝の前瓦窯跡から出土し

ており、「山字乙稲□」と(イ)と類似したものが同町黒熊の塔の峯から出土していることを考慮すると、(1)南大門および南辺築垣の修造には多胡郡内で生産された瓦が使用されていた、(2)同郡山字郷を本拠とする物部氏がこれに関係していた、の点を指摘することができる。これら以外に注目されるものとして「大伴」(Fig. 31-⑥)があるが、これを姓とみた場合、「大伴宿祢」が弘仁14(823)年に「伴宿弥」に改姓しており、この改姓以前のものである可能性を示している。今のところ類例が確認されていないため、これのみをもって判断をすることはできないが、この瓦の作成された下限、即ち修造の行われた時期を知る上で注意すべき資料である。

この他に「寺」(Fig. 32-⑬・⑭・⑮)があり、瓦のあて先を書いたものであることが考えられ、「館^(守カ)□」(Fig. 32-⑯)は職名を書いたものである可能性がある。「□□成□」(Fig. 31-⑧)は他の出土例から「少部成□」または「小郷成□」であることがわかり、これは比較的出土点数が多いが、「少部」または「小郷」については他の出土例および史料との検討が必要である。

上野国分寺の創建については『続日本紀』天平勝宝元(749)年に碓氷郡の石上部氏と勢多郡の上毛野朝臣氏の知識物献納の記事があり、これらの氏族が尽力したことがわかる。この地域の物部氏についてはまだ研究が進んでいないが、緑野郡・甘楽郡・群馬郡といった上野国の南西部諸郡に分布がみられ、神亀3(726)年の金井沢碑に物部君午足らが知識を結んでいることが記されていること、石上部氏と深い関係を有する氏族であることなどの点から、窯業生産との関連および仏教との深い係わりをもつことが推定される。今回出土した文字瓦と考え併せてみると、一族の中に中衛府の官人となっていた者のいることなどにより、政府の要請である国分寺の修造に氏族の活動として参加をした、あるいは尽力を求められたことが想定できよう。

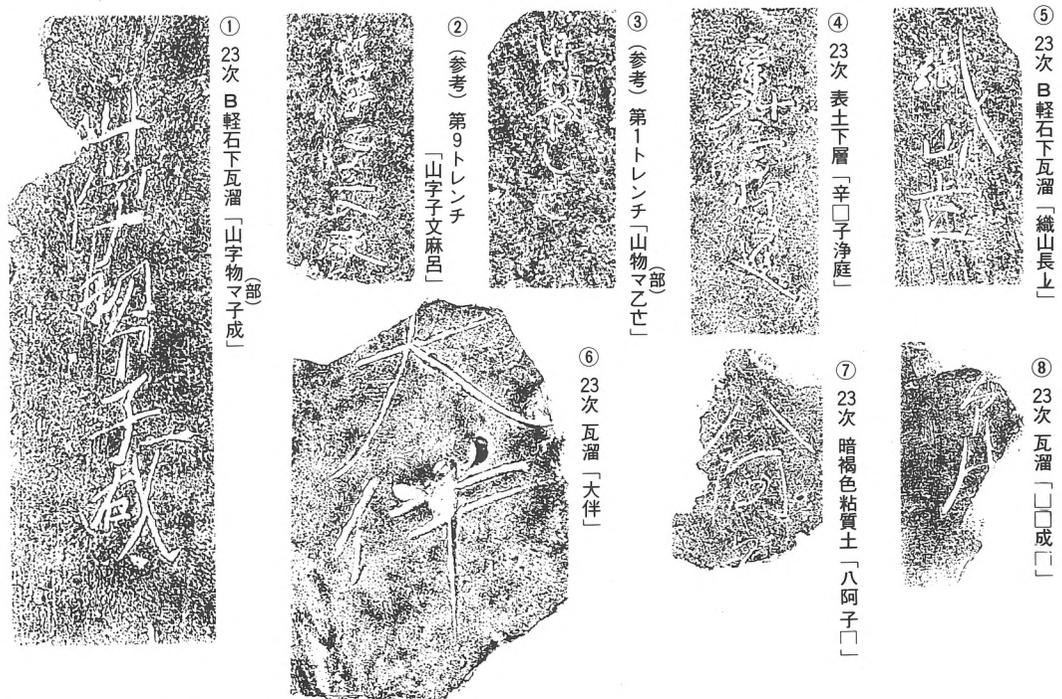


Fig. 31 南大門周辺出土文字瓦1. 縮尺 1/3

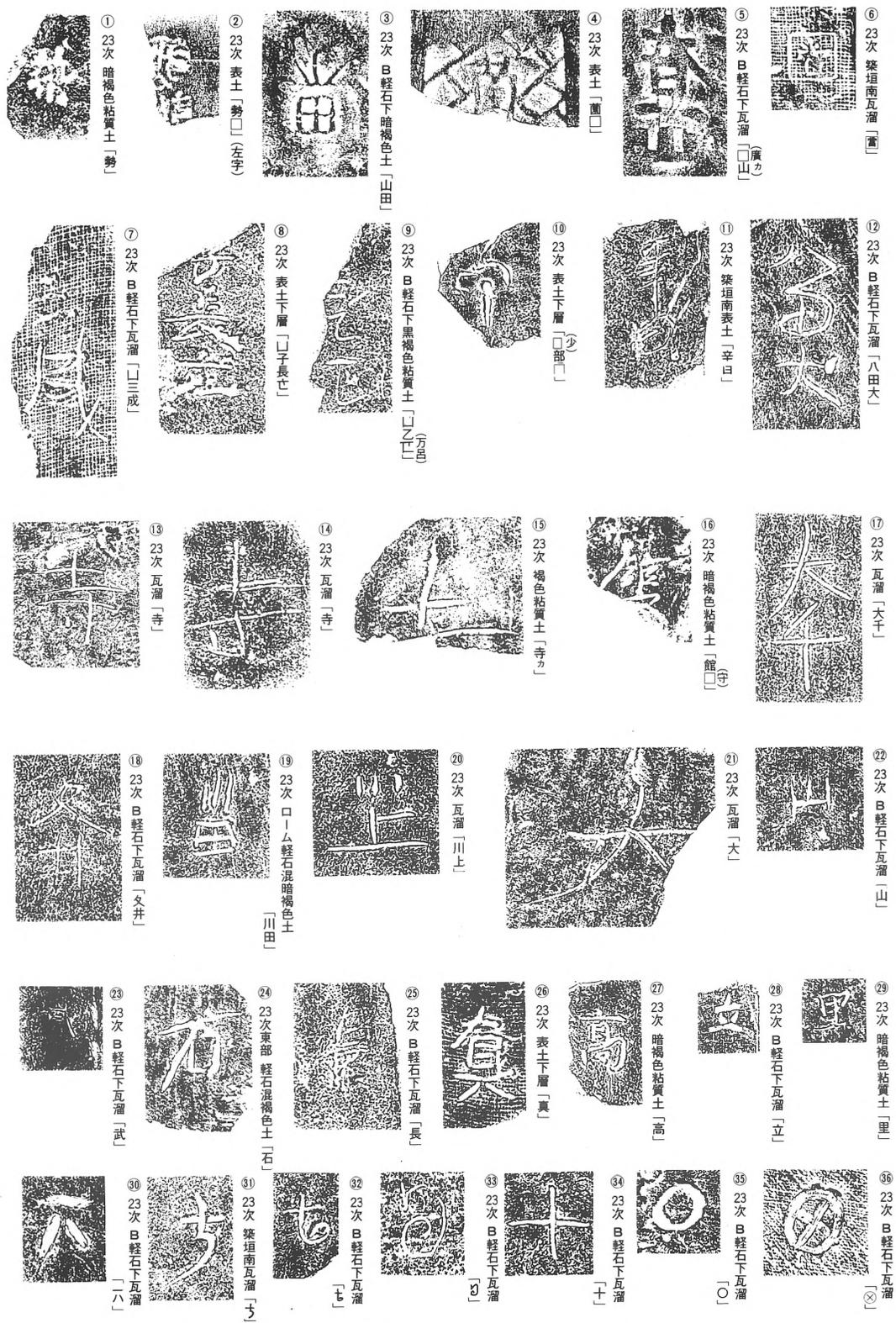


Fig. 32 南大門周辺出土文字瓦2. 縮尺 1/3

V ま と め

今回の調査の主な目的である寺域北辺部および僧房・南大門の確認調査を中心に、そのまとめと今後への課題を示しておきたい。

寺域北辺については、これまで(1)金堂中心から1町、(2)南辺築垣から2町、の2つの可能性が考えられてきた。第21次調査は史跡地北西隅の墓地跡で、金堂中心から1町の線上(N133.9)にかかる位置で行った。ここは周辺より一段高い地形となっており、築垣の遺存することが期待されたが、地表下20cm程度で砂質土の地山となっていることがわかった。このため築垣は残存していなかったが、N130から北側が僅かに高くなり、N136から北に向かって急に低くなっている状況が検出された。これを直ちに築垣の基部であると断定するには問題があるが、N136の北側で地形の変化のあることが認められる。(2)の位置では築垣・溝などの遺構は確認できず、また伽藍配置の上からみて金堂の北側部分が狭くなるが、(1)の位置付近は現在道路となっており、西半部分では東国分の集落がこれより北側にとどまってあることから、この道路の位置が土地利用上の境界となっていたことが考えられる。最終的には金堂中軸線の北側へ1町の位置で、現在道路舗装の下にあると伝えられる礎石の確認をまたねばならないが、以上の点から北辺築垣は金堂中心から1町の位置にある可能性が強いと判断される。

僧房については遺構を確認することができなかった。寺域北半部はほぼ全面が砂礫土の地山まで攪乱をうけており、この地山面には北西から南東への流水による削痕が認められ、また砂と小礫の堆積があった。この流水の時期は明瞭でないが、昭和56年度調査の推定東大門の内側でロー

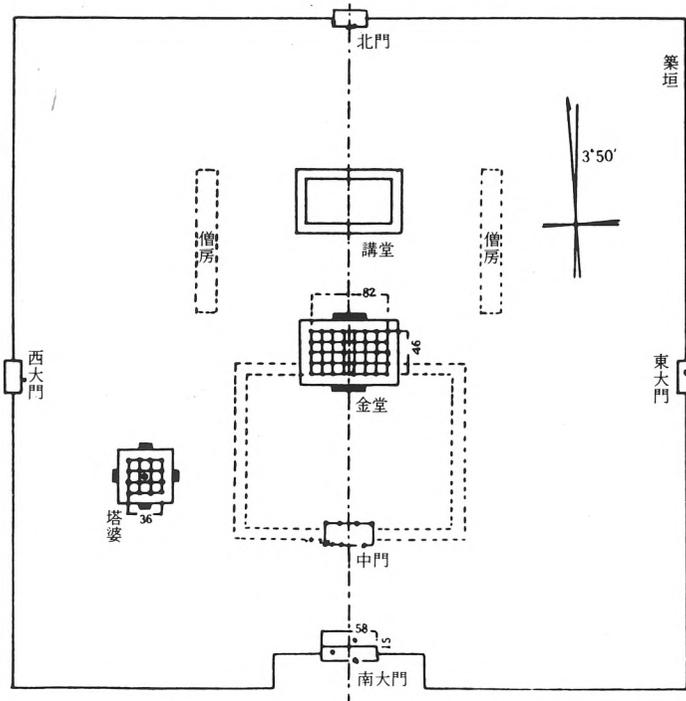


Fig. 33 伽藍推定図 (太田静六氏)

と、この上25~45cmのところ

にB軽石の純層堆積のあること、などの点を考え併せると、寺域北半部は地形的に流水の影響をうけ易く、国分寺の存続期間中においてもこの被害をうけたことがあるものとみられる。これに加えて集落に近接していることもあって、後世の攪乱も著しく、国分寺に係る遺構は井戸1基(S E 04)を確認したにとどまった。この井戸の所在から、この付近に居住区があったことが推定された。

昭和57年度の第17次調査区で、梁間2間で南北に長く（桁行9間分を検出）金堂と方位を一致させる掘立柱建物（SB09）が検出された。これの西側210cmの位置で、西側が低くなる段差のつくられていることから、これが西面回廊の一部である可能性が考えられた。しかしSB09の北方への延長部が確認されないこと、これの金堂寄りで礎石根石の痕跡とみられる遺構の検出されていることから、これが回廊であるか否かの判断は今年度の調査の結果によることとなった。そのためSB09の南端にあたるS43.5の線と金堂中軸線との交点付近で、中門と南面回廊の所在が推定される位置の調査を行ったが、これらの遺構は確認されなかった。ただこの東方のSD10から礎石とみられる石が2個出土しており、回廊は礎石建物であった可能性を示している。これらのことからSB09は回廊の一部ではなく、中門と南面回廊はより金堂に寄った位置にあった可能性も考えられ、この周辺の調査を実施した上で判断をする必要が生じた。

南大門については、「上野国交替実録帳」にその規模が記されているが、金堂中軸線と南辺築垣の交点付近が後世に溝状に掘り込まれていることから、東側1/3のみが残存している可能性が考えられた。また従来の研究でFig. 33のように南大門が南辺築垣の線よりも内側に入った位置にあることが想定されていた。これの確認を目的として調査を行ったが、東妻側の礎石3個と基壇、それに取りつく南辺築垣などが検出された。礎石は両側の心心距離が630cmで、南辺築垣の東半部はE-3°50'-Nの方位でこの中心部に取りつく。築垣は地山を削り出した上に、基部巾200cmで粘質土を1単元3~5cmで版築様に積み上げている状況が認められた。また1ヶ所のみであるが寄柱とみられる柱穴1対を検出した。寺域内は外に比べ約60cm高く造成されている。基壇の縁辺は玉石を並べて造られているが、周辺から角閃石安山岩の板石など加工されたものが出土していることから、これらが化粧材として使われていた可能性も考えられる。この調査の結果から、(1)南大門で検出された礎石の方位は金堂・南辺築垣の方位と約4°の振れをもち、塔とほぼ同方位を示す、(2)現状の礎石の奥行きは630cm（21尺）であるが、これは「上野国交替実録帳」の記載と異なる、(3)南大門基壇は造り替えの行われた状況があり、古い段階では南辺築垣と方位を同じくするものとみられる、(4)南辺築垣の西半部は東半部に対して北側に振れる方位をもつ可能性がある、(5)これまでの伽藍配置の想定と異なり、南大門は南辺築垣から内側に入って造られていた状況は認められない、(6)南大門の東約28mの所に方位を同じくする680×560cmで南北方向の基壇とみられる遺構がある、などの点が確認された。これまでに確認された遺構の方位が、金堂に一致するものと塔に一致するものに大別できる傾向のあることに注目されると同時に、「上野国交替実録帳」の記載と異なる状況のあることに新たな問題が提起された。

遺物としては、南大門周辺から出土した人名・地名の書かれた文字瓦に注目された。この中に「郷名+姓+名」および「郷名+名」の形式で書かれたものがあり、また郷名は1字に省略されて書かれたものがある。氏族名としては「物部」・「大伴」があり、郷名には「山字」・「辛□」・「八田」・「織」・「武」など多胡郡に関係するものが目立つ。国分寺の創建と修造に係わる氏族の動向を知る上で貴重な成果である。

PL. 1



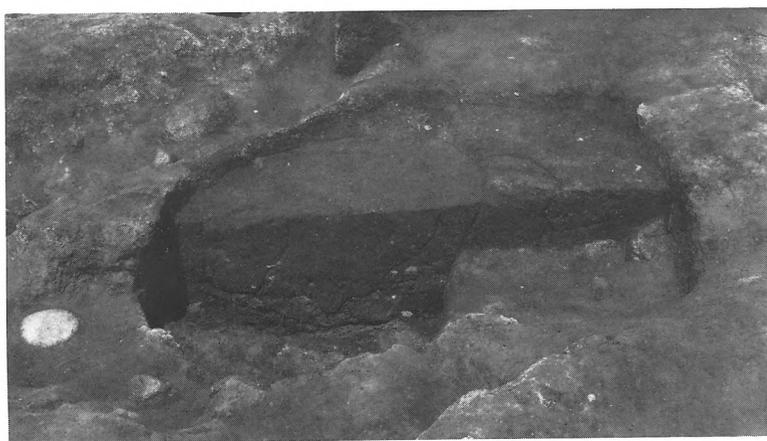
1. 第12トレンチ拡張調査区全景（西から）



2. SA01・SD07検出状況（南から）



1. 第12トレンチ拡張西
部調査区全景（南から）



3. SA01 柱穴重複検出
状況（南から）



(上) 1. 第20次西部調査区全景
(北から)

(下) 2. 第20次東部調査区全景
(北から)

3. 第20次西部拡張調査区全景
(東から)



1. SE04 検出状況
(南から)



2. SE06 検出状況
(南から)



3. SK14 検出状況
(南から)



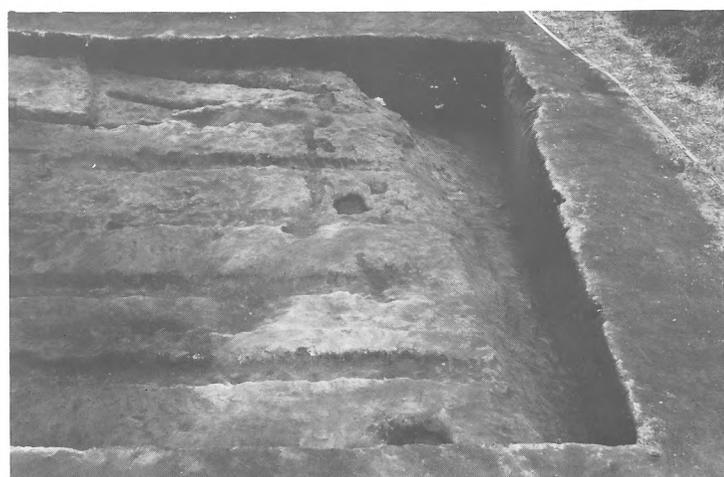
1. 第21次調査区全景
(東から)



2. 北辺築垣推定地周辺
検出状況 (南から)



3. 北辺築垣推定地
(西から)



(上) 1. 第22次調査区
全景 (西から)

(下) 2. 第22次西部調
査区全景 (南から)

3. SD10 周辺検出状況
(東から)



- (上) 1. SJ 09完掘状況 (西から)
(中左) 2. SJ 09ベッド状遺構 (南から)
(中右) 3. SJ 09南壁張り出し (北から)

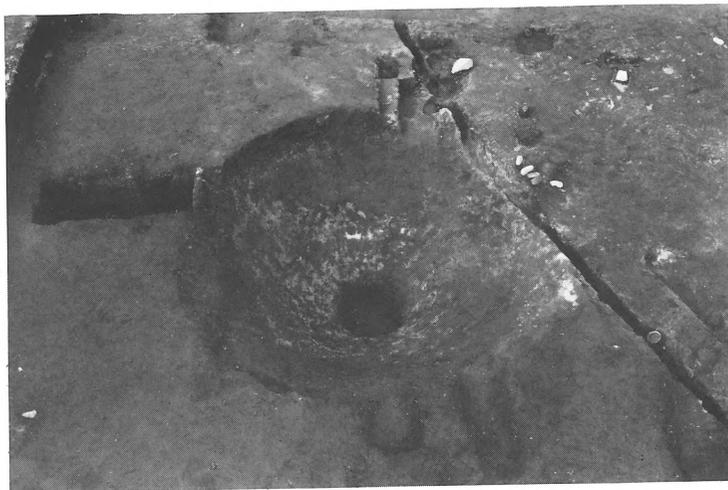
4. SJ 10 完掘状況 (西から)



1. 第22次東部調査区全景
(西から)



2. SJ11 完掘状況・左側
はSD10 (南西から)



3. SE07 完掘状況・右側
はSJ11 (南から)



1. 第23次調査区全景航空写真（上が北）



2. SF01・SB10 検出状況（北から）



SB10 基壇検出状況
(東から)



2. SB10・SF01・SD01
検出状況 (南から)



3. SB10 基壇北側縁石
検出状況 (北から)



1. SB10基壇石列検出状況（南から）

2. SF01築土・寄せ柱検出状況（東から）

3. SB10基壇内側石列積み上げ状況（東から）

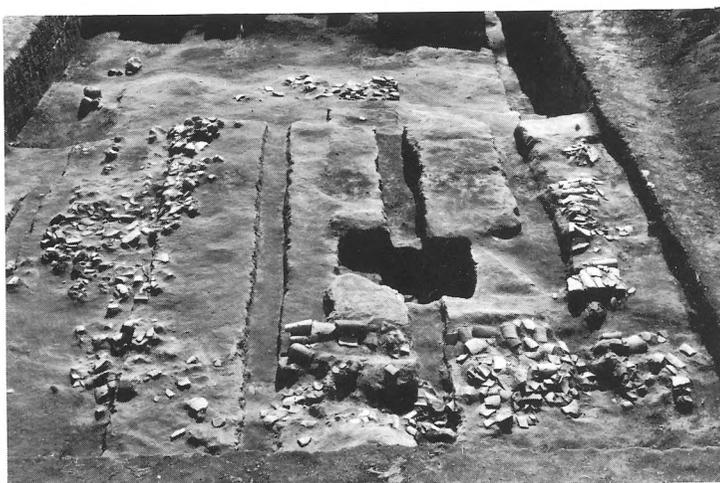




1. 第23次東部調査区
全景（東から）



2. 第23次東部調査区
検出状況（西から）



3. SB02 検出状況
（北から）



1. 第12トレンチ拡張 須恵器蓋



2. 第12トレンチ拡張 須恵器蓋



3. 第12トレンチ拡張 須恵器坏



4. 第12トレンチ拡張 須恵器坏



5. 第12トレンチ拡張 須恵器高台皿



6. 第12トレンチ拡張 土師器坏



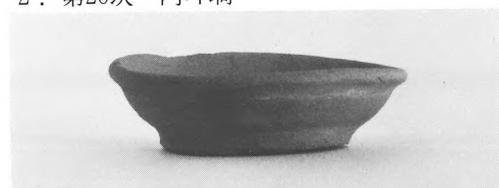
7. 第12トレンチ拡張 土師器甕



1. 第20次 内耳埴



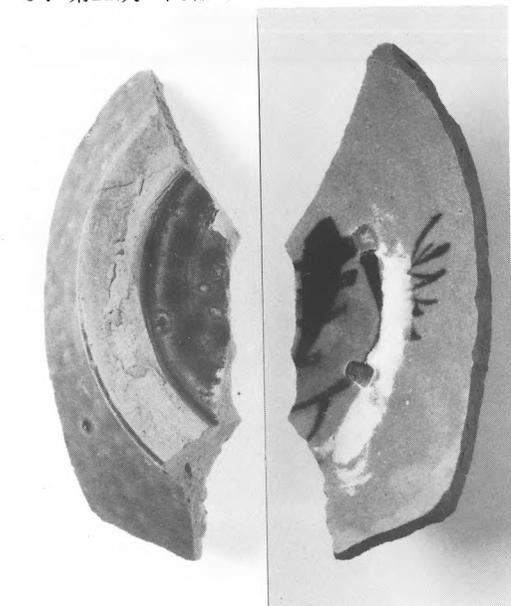
2. 第20次 内耳埴



3. 第20次 灯明皿



6. 第21次 陶器ぐい呑



7. 第21次 陶器・皿



4. 第20次 陶器・足付碗



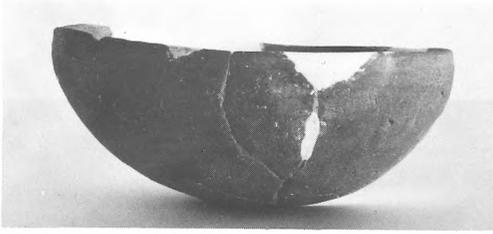
5. 第20次 灰釉陶・高台付底部



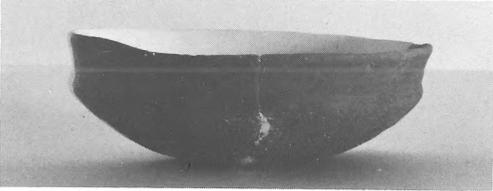
8. 第21次 陶器大甕



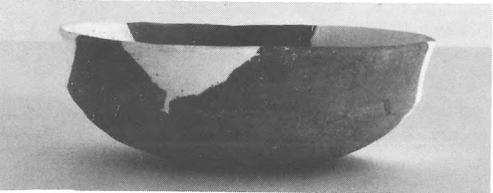
9. 第21次 素焼皿



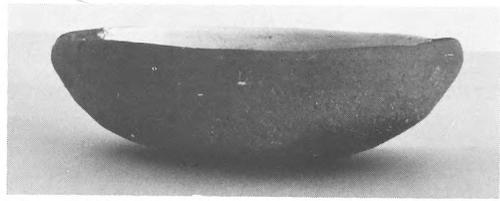
1. SJ 09 土師器坏



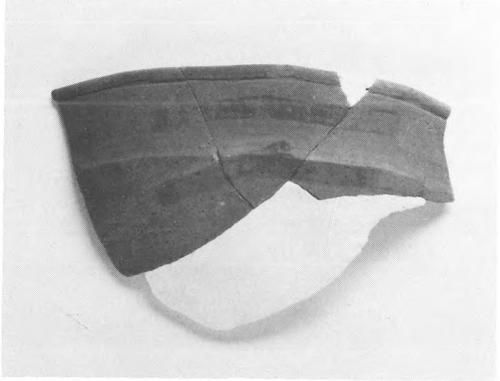
2. SJ 09 土師器坏



3. SJ 09 土師器坏



4. SJ 09 土師器坏



5. SJ 09 土師器坏



6. SJ 09 土師器甕



7. SJ 10 土師器甕



8. SJ 10 土師器甑



9. SJ 10 土師器坏



1. SJ 11 土師器長甕



4. 第22次 土師器長甕



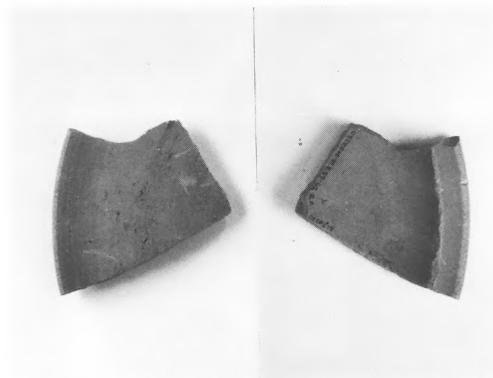
5. 第22次 須恵器蓋 (外面)



2. SJ 11 須恵器提瓶



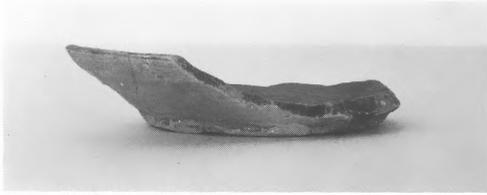
3. SJ 11 手捏土器



6. 第22次 須恵器蓋 (外面) (内面)



7. 第22次 須恵器坏



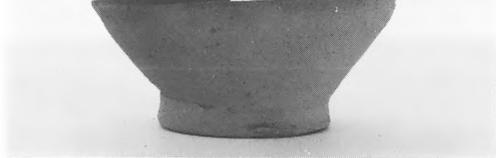
1. 第23次 須恵器皿



3. 第23次 須恵器蓋



2. 第23次 須恵器杯



4. 第23次 須恵器高台杯



◀ (創建期)

5. 第23次B 軽石層下瓦溜 軒丸瓦



◀ (改築用とみられる)

7. 第23次B 軽石層下 軒丸瓦



9. 第23次B 軽石層下瓦溜 軒丸瓦



7. 第23次B 軽石層下瓦溜 軒丸瓦



8. 第23次B 軽石層下瓦溜 軒丸瓦



10. 第23次B 軽石層下瓦溜 軒丸瓦



11. 第23次B 軽石層下瓦溜 軒平瓦 (創建期)



13. 第23次南大門基壇上面 軒平瓦



15. 第23次B 軽石層下瓦溜 軒平瓦



12. 第23次B 軽石層下瓦溜 軒平瓦



14. 第23次B 軽石層下瓦溜 軒平瓦



16. 第23次B 軽石層下瓦溜 軒平瓦



1. 第23次B軽石層下瓦溜 墨書瓦「^(丸)国足」



2. 第23次B軽石層下瓦溜

◀ 墨書瓦「里麻呂」

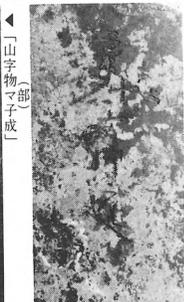


3. 第23次B軽石層下瓦溜

◀ 墨書瓦「馬カ」
「野」



4. 第23次B軽石層下瓦溜



5. 第23次表土下層

◀ 「山字物マ子成」



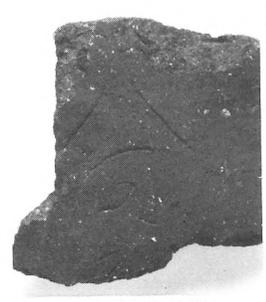
6. 第23次B軽石層下瓦溜

◀ 「辛□子浄庭」



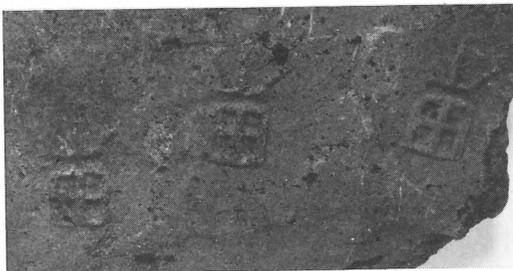
10. 第23次瓦溜「大伴」

◀ 「織山長上」



8. 第23次暗褐色粘質土

◀ 「八阿子」



9. 第23次B軽石層下暗褐色土 押印瓦「山田」



10. 第23次B軽石層下瓦溜

◀ 押印瓦「廣カ」
「山」



11. 第23次築垣南瓦溜

◀ 押印瓦「蓋」



12. 第23次瓦溜「寺」



13. 第23次暗褐色粘質土「館□」



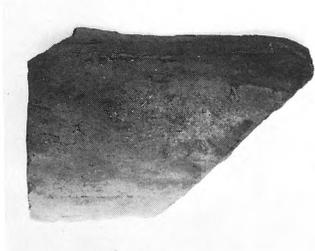
14. 第23次 築垣南表土

◀ 「辛白」

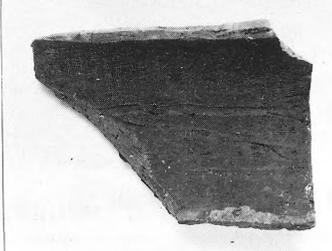


15. 第23次B軽石層下瓦溜

◀ 「八田大」



16. 第23次南大門周辺瓦溜 隅瓦 (凸面)



(凹面)



17. 第23次南大門基壇上 角閃石安山岩切石 (正面)



(側面)

参 考 文 献 (文字瓦関係)

- 〈報 告〉「国分寺の文字瓦」 上毛及上毛人 第66号 1922年
秋山吉次郎「国分寺址より出でし文字瓦に就て」 上毛及上毛人 第77号 1923年
住谷 修「上野国分寺の文字瓦に就て」 上毛及上毛人 第163号 1930年
相川 龍雄「上野国分寺瓦考(一)」 上毛及上毛人 第208号 1934年
同 「上野国分寺文字瓦譜」 1934年
住谷 修「上野古瓦文字考(上)・(中)・(下)」 上毛及上毛人 第218・219・220号 1935年
松田 鑽「上野古瓦文字(一)・(二)・(三)・(完)」 上毛及上毛人 第224・225・226・227号 1936年
相川 龍雄「上野国分寺瓦の考察」 考古学雑誌 第33巻第12号 1943年
同 「上野国分寺文字瓦研究(上)」 上毛文化 第9巻第1号(第76号) 1944年
住谷 修「上野出土文字瓦」 上毛史学 5号 1954年

調 査 関 係 者 (敬称略)

発掘作業員

一倉ヤヨイ・伊藤もと・入沢喜一・入沢タケノ・上原隆子・片山幾子・金井モトエ・菊地松之助・静キヌエ・渋谷ユキ・白井テル・住谷紀子・田原かねえ・塚田マサエ・塚田みさほ・塚田光代・塚田幸雄・仲野俊雄・蜂須賀トミ子・東野菊江・東野ノブ子・松田郁雄

整理補助員

関口功一(立教大)・大塚一彦・亀山幸弘・小林康典・柏瀬和彦・湯本俊明・間渕幸代・横澤永子(以上群馬大)・神宮淳美・木下道子・新井万里子・清水千景

協 力

群馬町教育委員会・前橋市教育委員会・群馬町東国分地区・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

この他に住谷隆司、住谷宗七、塚田 巖 ほか多くの方々のご協力とご指導を得た。

史跡上野国分寺跡発掘調査概要 4

印 刷 昭和59年3月30日
発 行 昭和59年3月31日
発 行 群 馬 県 教 育 委 員 会
〒371 前橋市大手町1丁目1の1
T E L 0272-23-1111
編 集 群馬県教育委員会文化財保護課
印 刷 松本印刷工業株式会社